2014
創刊号

NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

niwa 邇波

編集・発行　NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

目次

Ｈ２５年度　ニワ里ねっと活動記録 …… 1

文化遺産シンクタンクとしての「NPO」 赤塚次郎 …… 12

犬山市北屋敷遺跡出土の石器　横山　真 …… 14

今井焼 ―成立とその生産内容―　青木 修・大塚友恵・中野耕司 … 20

犬山の「虫送り」から考えるイネ害虫の今昔　奥野絵美 …… 34

入鹿池周辺の古墳踏査成果について　服部哲也・近藤健一…… 36

コラム　ただ今、派遣中！－東日本大震災復興関連の発掘調査に参加して－…… 41
服部哲也

ニワ里ねっとでは正会員・賛助会員を広く募集しています。

現在会員には、犬山市域をはじめ県内・県外の方も多く入会しています。私たちと一緒に文化遺産を活かしたまちづくりに参加してみませんか？

【正会員】
個人・団体：一口 3,000 円

【賛助会員】
個人・団体：一口 3,000 円（一口以上）

■ 会員特典

1．会員証の発行：裏面はスタンプカードになっており、ニワ里ねっと主催のイベントに参加するとスタンプが押せます。スタンプがたまると記念品が貰えます。
2．各種イベント案内の送付：会報「さとの四季だより」を年６回お届けします。
3．ニワ里ねっとイベントに会員料金で参加：バスツアー等イベントに会員料金で参加いただけます。

■ 入会申込の流れ

会員期間：4 月から翌年３月までの一年間
方法１：青塚古墳ガイダンス施設の窓口で受付
窓口で申込書を受け取って頂き記入の上、年会費を添えてお申し込みください。
方法２：お振込み
下記郵便振替口座にてお願いします。通信欄に「正会員年会費」又は「賛助会員年会費」とご記入ください。＊新会員様は「新規正会員費」もしくは「新規賛助会員費」と明記のうえ、住所・氏名等を必ずご記入お願いいたします。口座振込確認後、ご住所に「会員証」等を送付させていただきます。

■ 寄付金等の受付

下記の郵便振替口座にて「寄付金」を随時受け付けております。ニワ里ねっとの活動の応援、よろしくお願いいたします。

■ 郵便振替口座

口座番号　00850-9-198552
口座名称（漢字）　特定非営利活動法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称（カナ）トクヒ）コダイニワノサト ブンカイサンネットワーク

NPO 法人　ニワ里ねっと

活動記録 H25

文化遺産のみえるまちづくり

地域が保有している多様な文化遺産を失われる前に発見・保護し、その意義を学問的に評価し、得られた成果を広く共有する。そして地域が長い時間をかけて培ってきた文化の重要性を再発見する機会や交流の場所を提供する事により、コミュニティがまちづくりの基盤として機能していく環境を整える。

ニワ里ねっとは、さまざまな取り組みを通じて「文化遺産のみえるまちづくり」事業を実現していきます。

犬山街プロジェクト

事業の名称「犬山市文化遺産活用活性化事業」
犬山街プロジェクトとは。
犬山市域に伝わる数多くの複合的かつ個性的な文化遺産を，地域に根ざした個性溢れる文化資源として，光り輝く地域の宝として位置づけるため，その地の風景を基軸にして時空間的に結び付ける仕掛けを作る。
これらをあたらに位置づけ、「見える化」した文化遺産を基に，この地にオンリーワンの新しい広域的な文化観光エリアを創出し，文化遺産を活用した地域活性化の新モデル事業を創造する。
（本事業は平成 24 年度より犬山市と協働で行っているプロジェクトです。）

■犬山市内悉皆調査

犬山市域７地区（栗栖・犬山東・犬山西・城東・今井池野・羽黒・楽田）に点在するさまざまな文化遺産を、ニワ里ねっと会員の調査員のみなさんとともに調査・記録を行いました。

昨年度の３００件の文化遺産につづき、今年度はお祭りや物語なども含め、２００件の文化遺産を対象としました。

調査する過程では、さまざまな人との出会いがあり、人との出会いから新たな文化遺産と出会う、そんな場面も多く見受けられました。

また、入鹿池周辺の悉皆調査ではこれまで知られていなかった新規古墳が発見され、注目を集めました。

今後は、これらの悉皆調査の成果を活かして、犬山の文化遺産の魅力を発信してきたいと思います。

入鹿池周辺の悉皆調査

右　犬山市今井附近の風景
左　内田のまきわら船

■「犬山城下町文化学」no.02
―色へんげ、伝統の本絵具で絵付体験―

とき：平成25年11月24日
ところ：岩田洗心館
参加者：25名

犬山焼について学ぶワークショップ。約200年の伝統を持つ犬山焼本窯元、7代目尾関作十朗の尾関立志さんから犬山焼の絵師たちについてのお話を伺いました。また、伝統の本絵具を使った犬山焼の絵付を体験、出来上がった作品はそれぞれの思い出の品になりました。

左　岩田洗心館の趣ある部屋で、絵付け体験　　右　参加者には、抹茶と和菓子の振舞いも

■木曽街道ウォーキング
～善師野宿から土田宿へ～

とき：平成25年12月22日
参加者：34名

旧街道の趣残る木曽街道善師野宿や、熊野神社古墳群など、善師野・塔野地周辺の文化遺産を巡りました。散策途中で披露された昔ばなしの紙芝居は参加者に大好評でした。

継鹿尾観音のものがたりを、紙芝居で。

■入鹿池を歩こう！　入鹿の自然と歴史を感じるツアー

とき：平成25年10月6日
参加者：26名

講師に大口町歴史民俗資料館の西松賢一郎さんを迎え、入鹿池周辺の遺跡群や古墳など、貴重な文化遺産を巡りました。悉皆調査によって確認された新規古墳も見学しました。謎に包まれた入鹿の歴史の一端を感じる散策となりました。

■ワークショップ
石上げ祭と尾張冨士さくら太鼓

とき：平成26年1月13日
参加者：35名

尾張冨士大宮浅間神社でおこなわれる「石上げ祭」について学びました。

尾張冨士浅間神社宮司の山田健さん、石上げ祭伝承保存会会長の奥村正成さんにお話をしていただき、また実際にお祭りで使われている「献石（けんせき）」も間近で見学することができました。

青塚古墳の墓前で「尾張冨士さくら太鼓」による演奏も行われました。

右　尾張冨士さくら太鼓による演舞

左　入鹿池の朝景

国史跡 青塚古墳

■青塚古墳史跡公園

平成２５年度ガイダンス施設来館者数：１２３６５名
小中学校の校外学習：２７校
平成２２年４月から管理運営を，ニワ里ねっとが犬山市から受託、今年度で４年目。今年度も多くの方にご来場いただきました。
地域のみなさんが日常的にふらっと訪れていただけるような、そんな場所に少しずつですが変わってきたように思います。

稲沢バスツアー 長光寺六角堂前にて

ニワ里のイベント

■散策「尾張白山と大山廃寺

とき：平成２５年４月２７日
参加者：２２名
尾張白山に登頂し、大山古墳群や、国史跡大山廃寺など、歴史残る文化遺産を見学しました。天候にも恵まれ、白山より景観を一望することができました。

■バスツアー 銀杏舞う尾張国府のまち「稲沢」への旅～尾張国分寺跡発掘調査現場と秘仏を訪ねる～

とき：平成２５１１月２７日
参加者：２５名
案内人に北條献示さん（稲沢市教育委員会）をお迎えして、稲沢の文化遺産をバスで巡りました。国府宮神社の磐座（いわくら）や秘蔵の仏像など普段は見ることのできない文化遺産を見学することができました。

■邇波史楽座

とき：平成２５年５月１８日
第６回目となる邇波史楽座。今年度は、羽黒高橋の獅子保存会のみなさんにお越しいただき、獅子神楽の演舞をしていただきました。また、会場内には地域のみなさんによる出店も数多くあり、１４００名を超えるたくさんの方にご来場いただきました。

右：史楽座、ステージでは獅子が舞った
左：新緑の中、大山廃寺周辺を散策

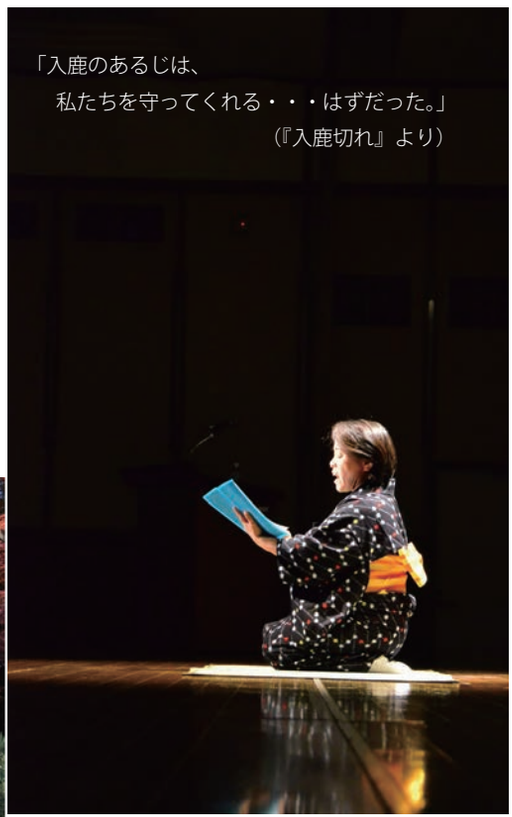
助成金事業

■ シンポジウム

歴史座「入鹿の里と屯倉」

とき・平成25年11月29日
参加者：130名

未だ謎の多い入鹿屯倉をメインテーマに、新発見の古墳など旧石器から近現代まで「入鹿」の地にまつわる歴史を集めたシンポジウムを開催。皇學館大学名誉教授渡辺 寛先生に特別講演をしていただきました。また、第二部では広瀬まりさんによる入鹿の悲しき物語「入鹿ぎれ」の語りや、ニワ里ねっと会員による発表など、入鹿の歴史をさまざまな角度から眺めました。



上：歴史座、広瀬まりさんによる語り「入鹿切れ」
左：旭堂南海さんの講談が、小牧山に響く

■ 栗栖の里に縄文人を探せ！

（平成25年度大山市市民活動助成金）

縄文時代の遺跡「尾崎遺跡」が位置する大山市栗栖。地域の歴史により親しんでもらおうと、栗栖小学校と協働でワークショップや落語会を開催。児童とドングリを採集・調理をして縄文食を体験したり、落語家桂九雀さんによる考古学落語「縄文さん」を上演したりと、面白おかしく地域の歴史に親しんでいただきました。

■ 講談師 旭堂南海さんと歩く 小牧山城

（小牧山城築城450年記念市民団体チャレンジ事業補助金）

とき・平成25年11月30日
参加者：（散策）42名、（講談の会）52名

信長が築いた小牧山城を、講談師旭堂南海さんと一緒にめぐりながら、信長や小牧山城に関わるミニ講談を聞いていただきました。

また、考古学の専門家による小牧山城の発掘調査成果の解説など、充実した散策となりました。

左　考古学落語の上演、栗栖公民館にて
右　栗栖小のみんなと縄文の食を学びました

その他 委託事業

■西尾市遺跡詳細分布調査

期間：平成25年11月～平成26年3月

西尾市教育委員会から委託を受け、旧幡豆町域の分布調査を行いました。西尾市幡豆歴史民俗資料館の伴野義広さん、牧野照美さんのご協力のもと町内を踏査しました。各所で土器等などの遺物を採取したほか、既存の遺跡以外の場所でも多くの遺物を拾うことができました。2月22日には散策「文化遺産！発見ウォーク（参加者22名）」、3月21日には分布調査成果報告会「歴史座ｉｎ幡豆（参加者60名）」を開催し、地域の方に調査成果を報告しました。

上：最新GPSをつかった分布調査の様子
下：歴史座ｉｎ幡豆、伴野さんの矢穴石のお話

文化遺産カード・AR事業

■文化遺産カード

平成22年から作成を開始した「文化遺産カード」。平成25年11月には犬山市・弥富市・一宮市・春日井市・常滑市・養老町・垂井町・池田町で自主制作カード11種・平成26年12月には信濃川火焔街道（新潟県）さんのご協力によって長岡市・新潟市・三条市・十日町市・津南町で新たに12種のカードが仲間入りしました。これらを加えて文化遺産カードは合計102種類に。ついに100種類を突破しました！また「文化遺産カード」は現在商標登録申請中。昨年12月に商標登録申請番号「商願2013－94886」を取得しました。

■犬山文化遺産ナビ・文化遺産カードナビ

「犬山の文化遺産」および「文化遺産カード」の場所や詳細を紹介するナビ「犬山文化遺産ナビ」「文化遺産カードナビ」が昨年度よりスタートしました。スマートフォンやタブレットで使えるアプリ「Ｌａｙａｒ」を使用して使うことができます。このナビを使用すると、自分の場所からどのくらい離れたところに、どんな文化遺産や文化遺産カードがあるか一目で分かることができます。

右：火焔街道の文化遺産カード
左：「犬山文化遺産ナビ」の画面

犬山市東之宮古墳出土三角縁唐草文帯三神二獣鏡（株式会社ラング　PEAKIT 解析画像）

平成２５年度
ニワ里ねっと活動報告

平成２５年

4月　5月　6月　7月　8月　9月

ニワ里ねっと事業 青塚古墳管理委託事業

青塚古墳管理委託

4月14日（日）
ニワ里カレッジ「尾張白山周辺の文化遺産を訪ねて」

4月21日（日）
ニワ里ねっと総会

4月27日（土）
散策「尾張白山と大山廃寺」

5月18日（土）
史楽座

5月25日（土）
バスツアー「両面宿儺の幻影を求めて！新緑の飛騨路をめぐる」

6月16日（日）
青塚古墳を守る会
ニワ里カレッジ「土器は何でくっつける？」

7月31日（水）
ワークショップ「遺跡の昆虫化石を探そう！」

8月11日（日）
ニワ里カレッジ「大縣神社と青塚古墳」

8月21日（水）
ワークショップ「土器の模様を写そう！」

9月25日（水）
セミナー「膠を学ぶ」

犬山街プロジェクト

文化遺産ナビスタート

犬山市内悉皆調査

7月2日（火）
犬山市助成金・栗栖分布調査

7月23日（火）
犬山市助成金・ワークショップ「打製石斧をつくろう」

助成金事業・その他委託事業

4月6日（土）
昼飯大塚古墳歴史公園完成式典古代劇「青野ヶ原に起つ」委託業務

6月29日（土）
名古屋大学博物館「名大博物館で落語を聴こう！」委託業務

7月11日（木）
養老町の歴史文化資源普及活動委託業務　象鼻山キノコ栽培ワークショップ

7月27日（土）
養老町の歴史文化資源普及活動委託業務　歴史ワークショップ「養老石で火をおこそう」

平成２６年

１０月

10月8日（水）～12月8日（日）
企画展「入鹿の里を求めて」

10月19日（土）
まほら講座「石器時代の入鹿池」

10月6日（日）
散策「入鹿池を歩こう！～入鹿の自然と歴史を感じるツアー～」

10月26日（土）
散策「戦国のみち、織田街道散策」

10月4日（金）
犬山市助成金・縄文時代の衣食住ワークショップpart1

10月17日（木）
犬山市助成金・縄文時代の衣食住ワークショップpart2

10月9日（水）
養老町の歴史文化資源普及活動委託業務　歴史講座

１１月

11月9日（土）
シンポジウム「入鹿の里と屯倉」

11月16日（土）
まほら講座「入鹿池周辺に立地する古墳～分布調査成果もあわせて」

11月27日（水）
バスツアー「銀杏舞う尾張国府のまち「稲沢」への旅」

11月24日（日）
ワークショップ「犬山城下町文化学ｎｏ．02　―色へんげ、伝統の本絵具で絵付体験―」

11月5日（火）
犬山市助成金・縄文時代の衣食住ワークショップpart3

11月23日（土）
犬山市助成金・栗栖で上方落語九雀亭

11月30日（土）
小牧市助成金・散策「講談師旭堂南海と歩く小牧山城」

11月17日（日）
犬山市東之宮古墳普及啓発事業「あつまれいぬやまっこ！うきうき大行進」

西尾市旧幡豆町分布調査

１２月

12月8日（日）
ニワ里カレッジ「丹羽郡の古代寺院を読み解く」

12月21日（土）
ワークショップ「ドングリから学ぶ暮らしの知恵」

12月22日（日）
散策「木曽街道ウォーキング～善師野宿から土田宿へ～」

12月1日（日）
大口町「人気講談師と歩く歴史めぐり」講座開催委託

1月14日（火）～28日（火）
東之宮古墳普及啓発　展示「東之宮古墳に挑む」

1月19日（日）
東之宮古墳普及啓発　講演会「東之宮古墳と冬至王」

2月22日（土）
西尾市幡豆町歴史散策

1月

1月18日（土）
まほら講座「入鹿屯倉の幻影」

1月13日（月）
ワークショップ「石上げ祭と尾張冨士さくら太鼓」

1月25日（土）
犬山市助成金・栗栖分布調査

２月

2月9日（日）
ニワ里カレッジ「壬申の乱」

2月15日（土）
まほら講座「入鹿池の築造と新田開発・その後の入鹿池」

2月7日（金）、8日（土）
養老町の歴史文化資源普及活動委託業務象鼻山キノコ栽培ワークショップ

2月16日（日）
養老町の歴史文化資源普及活動委託業務　文化遺産ウォーキング

3月11日（火）
犬山市助成金・栗栖分布調査

３月

3月21日（金）
西尾市幡豆町歴史座

文化遺産シンクタンクとしての「ＮＰＯ」

ＮＰＯ法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク　赤塚次郎

1）ニワ里ねっと誕生

平成22年（2010）2月25日，特定非営利活動法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク（略称「ニワ里ねっと」）が誕生した。当初の活動目的の最大の課題は，犬山市に所在する国史跡公園「青塚古墳」の運営にあったのは事実である。ある種，行政施設を管理運営する特定の組織母体が必要だったからでもある。しかしむしろ，必死にこの美しい公園を今まで守り抜いてきた人物への敬意と，その継承のためには「この場面を何とかしなければいかん・・大変なことになる・・」という素直な思いが先行した点も，また事実である。まず僕も含めて3人の仲間が集まった。やがて具体的な「ＮＰＯ」という形ができあがっていったのであるが，そこに至る過程は紆余曲折でもあったと記憶している。

運営をはじめて，転機は3年目を迎える時にやってきた。中核となる事務局内の変動と，文化庁がまとめた補助事業に参画するかどうかの瀬戸際であった。一つの決断が今の「ニワ里ねっと」の運命を決定した。そして「文化遺産の見える」という当ＮＰＯの旗印であるフレーズも，名古屋駅前の小さな会議室での会話の中から誕生した。事業や企画に支援・賛同してくれる仲間がいる事，そのころから特に強く感じるようになっていった。そしてやがて一つの「ある夢」が見えてきた。

2）目指せ「シンクタンク」

ＮＰＯには明確なミッションが必要とされる。単純明快な方向性が良い。僕らのミッションは「文化遺産の見える街づくり」である。行政的な香りがする「文化財」ではなく，どちらかというと市民サイドの評価システムである「文化遺産」を活用し，地域の中に埋もれた歴史をひも解き，崩れかけた歴史レイヤー（歴史の地層）を見つめ直す。そして現在の日常生活の場面に活かしていこうという試みである。特定の史跡公園だけを運営する組織ではない。もちろん現在の青塚古墳史跡公園は僕らの活動拠点となっていることは間違いない。しかしここから，あらゆる場面で，時空を超えた専門性の高い提案をしていきたいと考えている。それはまさに文化遺産を基軸にした街づくりそのものへの提言である。とはいっても，まだまだ具体的な内容を提言し，実現化へ踏み出せるような動きにはなっていない。これからだ，しかしそのための優れたスタッフや仲間たちが集まってきた。実に頼もしい。

シンクタンクとは，民間サイドから企画・提言や課題・論点などをまとめ住民や関係機関等に提供する研究機関であるが，むしろその過程や方向性を楽しむことができるような，ＮＰＯ系シンクタンクが理想である。近い将来に具体的な提言とそれに基づく具体化の活動をぜひ実現させたい。

3）試行錯誤と資金不足

夕刻にある地域の会合に顔を出す。そこで住民の皆さんから思わぬことばが帰ってきた。「君たちの居場所との間には，見えない壁がある」それは僕らの思い上がりでもあった。地域の中や集まりの中に今一つ深く踏み込んでいない，弱さが露呈した瞬間であった。カッコいい言葉や踊るような楽しい内容，それは誰にでも描けるが，そこに真の主体性が感じられない。申し訳ないが，行政サイドの担当者によく見かける雰囲気と良く似ているかもしれない。一から立ち位置の見直しをはじめる事になっていった。同時に「ＮＰＯ

＝ボランティア」という見方がまだまだ一般的で，僕らの活動においてもよくこうした意見をお聞きする。「そうではなくて・・」と思うが，では実際にどうした活動であれば，皆さんに一つ一つ課題解決のＮＰＯ活動として認められるのか。そしてそこに人的・物的支援をいただけるのか。妙案はない。ただ顔が見える関係を前提とつつ何となくであるが，手応えを感じつつある。

事業型のＮＰＯ，そこには動かす資金が必要だ。専門性の高いスタッフはもちろんである。愚痴っぽく，延々と続く資金不足。今年は特に銀行に通う事が多くなった。補助金・助成金は諸刃の剣である。概算払いはほとんど期待できない。出来高勝負。だから，そこまでの資金はどうするのか，一般的な企業と全く変わりない。そんなことさえ知らなかった。

企画・活動の中で立ち行かなくなる「もうダメだ」と思う。すると何処からともなく声をかけてくれる人が現れる。涙が出るほど嬉しくなる。勇気がわいて，また一歩，歩み始める。その道のプロがほぼ無償で技術と経験を提供してくれるのだ。そんな連続が今に至る。ＮＰＯとはいったい何だろうか・・・。

4）僕らにとっての運動力とは

現状は，公的機関からの受託事業が主体となり，一般的な寄付・収益は限られ，わずかなパーセントに留まっている。アメリカのような企業や民間からの多額の「寄付」は夢物語である。多くのＮＰＯが頼る助成金は，こと「文化遺産」系となるとほとんど限られ，ある種，皆無に近い。やはり資金不足と経営基盤の弱さは事実である。受託事業の中には，一般管理経費も今一つ難しい場合もある。何か何処か勘違いしている。

市場から資金を調達できないＮＰＯにとって，やはり「寄付」は大切であり要である。「市場からではなく市民から資金を調達すること」。であるが，そう容易い事ではない。会費や寄付金も少しずつではあるが微増している。また寄付といってもさまざまな形態があり，モノとしての寄付も有効とされているが，その道筋を未だ描けずにいる。この点はまだまだ運動不足の感は免れない。寄付率を上げるのが直近の課題である。僕らの活動に意義と特別な価値を見いだし，応援してくれるヒトがいる。ＮＰＯだからできる仕組みがある。まずは身の丈にあった活動の中から，明確な企画提言に対して寄付・助成を募ってみたい。

僕らの運動力の源は何だろうか。企画を実現する資金・寄付，それもある。ギリギリの中で活動するＮＰＯは，いつも慢性的な人手不足。しかしそこに人びとの輪が広まり，無償で支援してくれるヒトが現れる。そして笑顔があり，不思議な力が湧いてくる。その力は確実に蓄積されていくという事は少ないが，ある事を契機に不定期に蘇るという不可思議な特徴があるようだ。

5）文化遺産「ＮＰＯ」で生活すること

今年度，二人の正式な職員を採用した。「ＮＰＯニワ里ねっと」としてのはじめての職員の採用である。若者が二人手をあげてくれた。事務局内では新規採用予定者は一名が限度であると判断していたが，予想に反して意中の若者が「ＮＰＯでやってみたい」と言ってくれた。とても嬉しく，僕は迷うことなく「お願いします」と応えた。もちろん「赤字の船出」を覚悟した。学部を卒業して生活を夢見る新しい職場，その就職先に「ＮＰＯ」が新たに加わろうと，もがき苦しんだ瞬間であった。

若者の就職先の一つに，僕らのような文化遺産系ＮＰＯが存在し，市民権をもち，一つの市場が生まれる。それが大きな夢である。先はまだまだ。霧の中にあるが，「森の中のデカルト」がそっとつぶやくように，いつかこの「真っすぐ先」には何か，きっとまっていると堅く信じている。

ＮＰＯニワ里ねっとの活動を観て，そこに集う人びとの笑顔にふれ，またこの場に来たいと感じる。そしてその心が，やがていっしょに社会の課題解決に向って立上がる力となる。もし，少しでも共感できれば，迷わず踏み出してほしい。僕らといっしょに，新しい地図を作るために。

犬山市北屋敷遺跡出土の石器

株式会社ラング　横山　真

愛知県犬山市羽黒の西端に椿地区が所在する。犬山城下町から南に続く段丘崖が発達し，西隣の丹羽郡大口町との市界を形成している。ここで紹介する北屋敷遺跡は椿地区に所在する旧石器時代の周知の遺跡として登録されているものである。段丘崖縁辺に広がる遺跡として知られており，現状では周辺の開発に伴い環境が激変しているが，遺物等の採集が認められる。今回の再実測調査は，市史に掲載されている資料を中心に実施した。なお遺物等の内容については，すでに犬山市史・史料編三考古・古代・中世に掲載されているので参照していただきたい。

掲載した石器の画像は、対象の三次元データを演算することで多様な情報を取得し、それらを考古学的観察に最適化する「ラングシステム」（http://www.lang-co.jp/technology/technology.html）によって生成したＰＥＡＫＩＴという解析画像である。

本資料に用いたＰＥＡＫＩＴは、微細な起伏構造線の抽出を可能にする地上開度画像と、立体感のある表現を可能にするレリーフ画像という、二種類の解析画像を重合表示したものであり、それぞれの解析方法の特長を併せもつ画像となっている。

なお一覧表内備考に記載した内容は、堀木真美子氏に御教示。

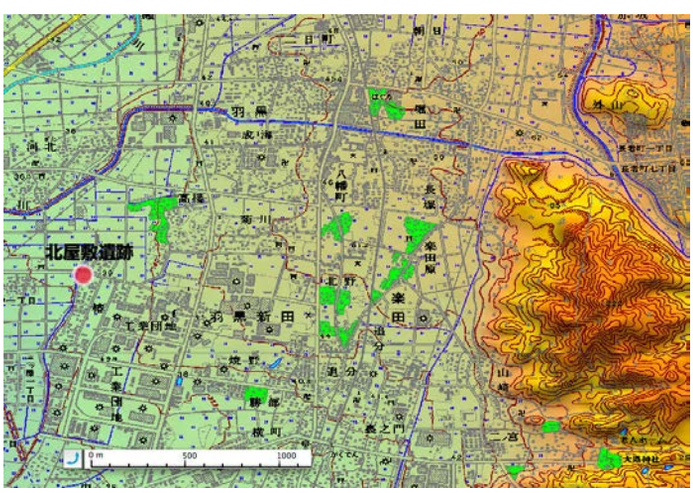
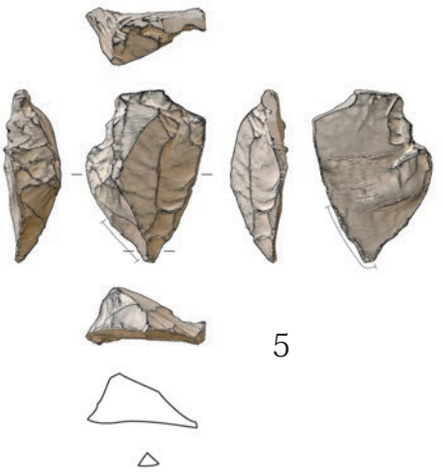
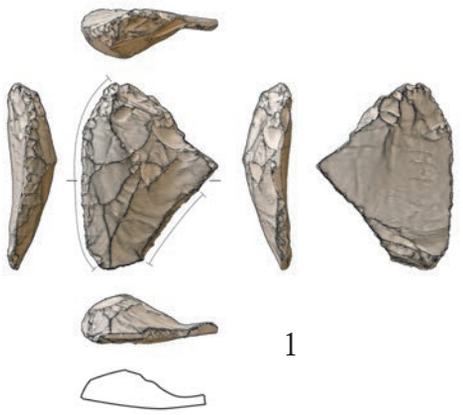


図１　北屋敷遺跡地図

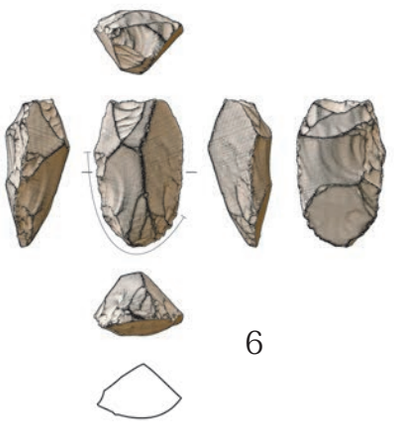
写真１　北屋敷遺跡遠景



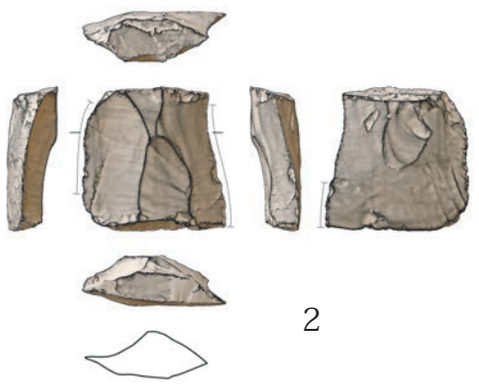
5



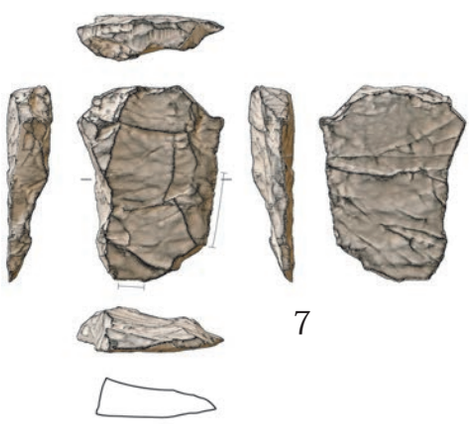
1



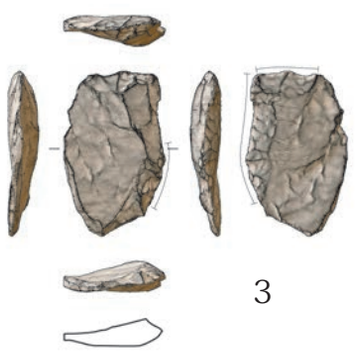
6



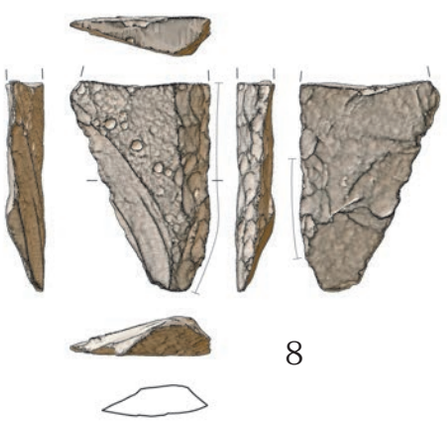
2



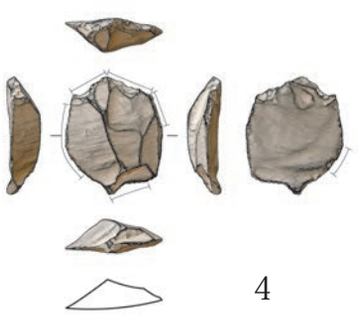
7



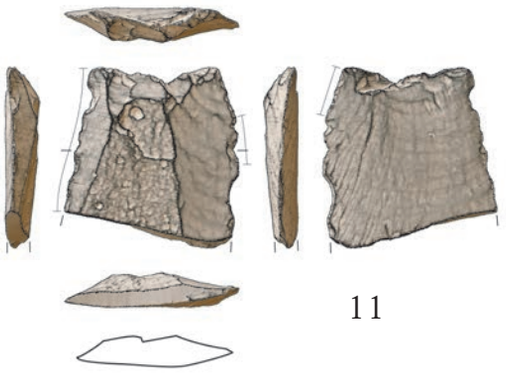
3



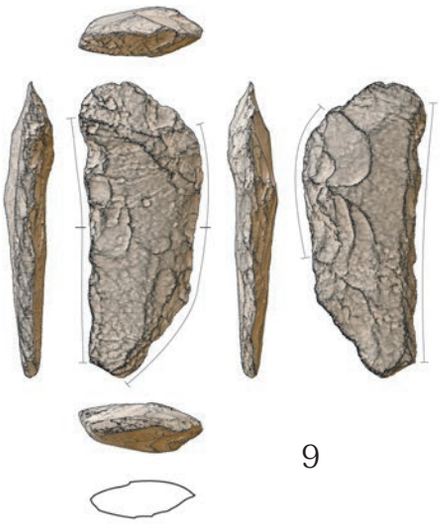
8



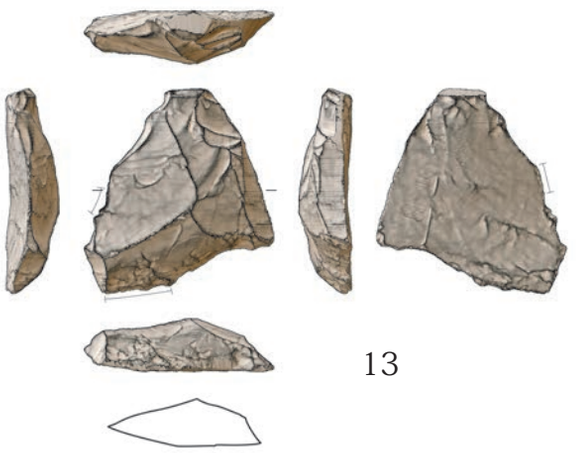
4



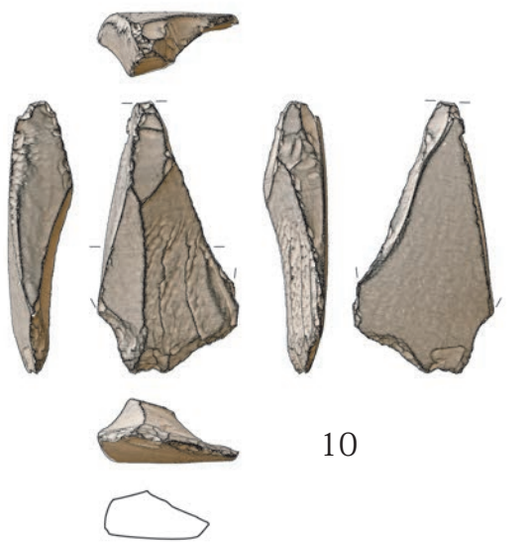
11



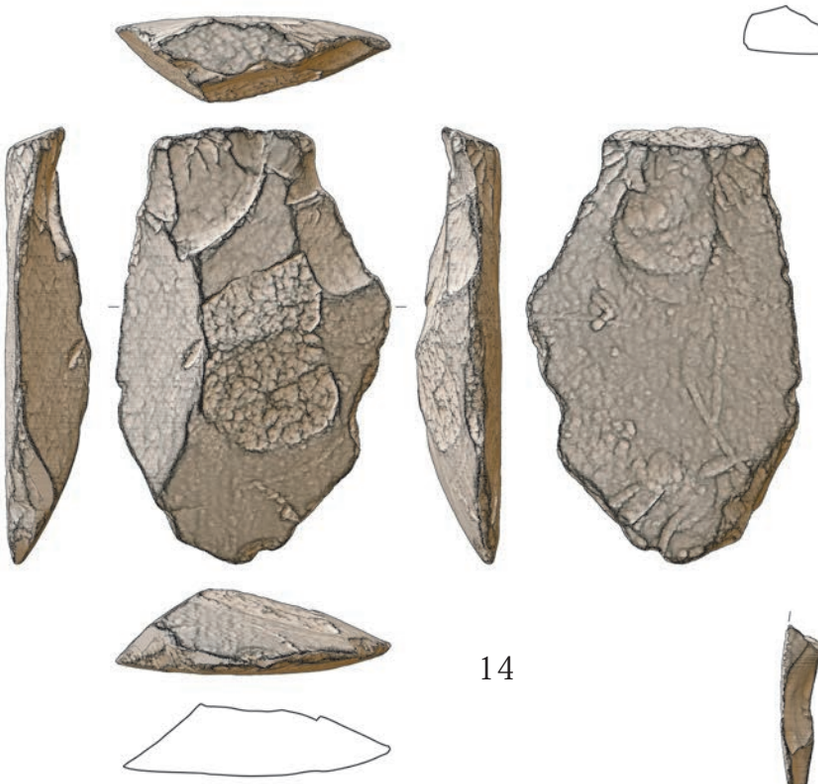
9



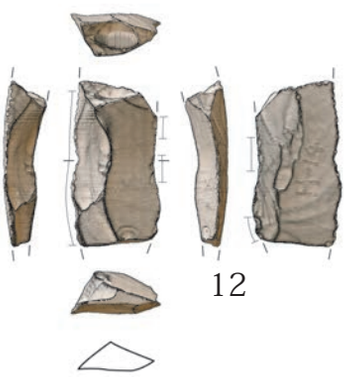
13



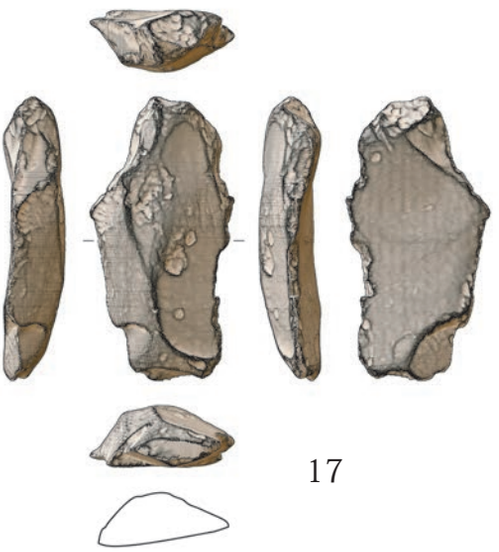
10



14



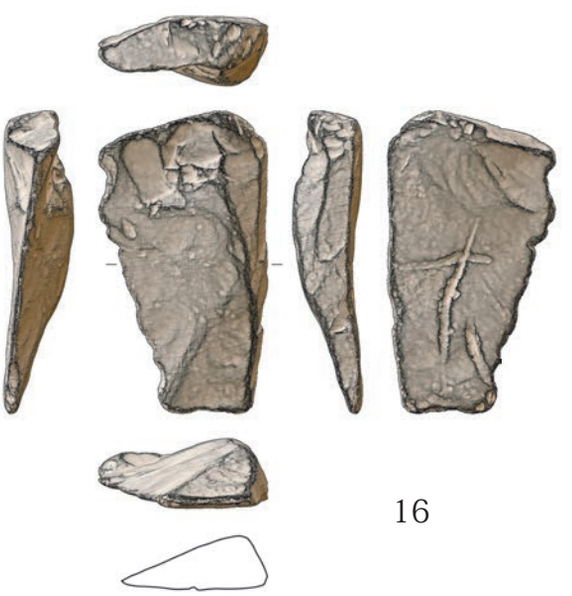
12



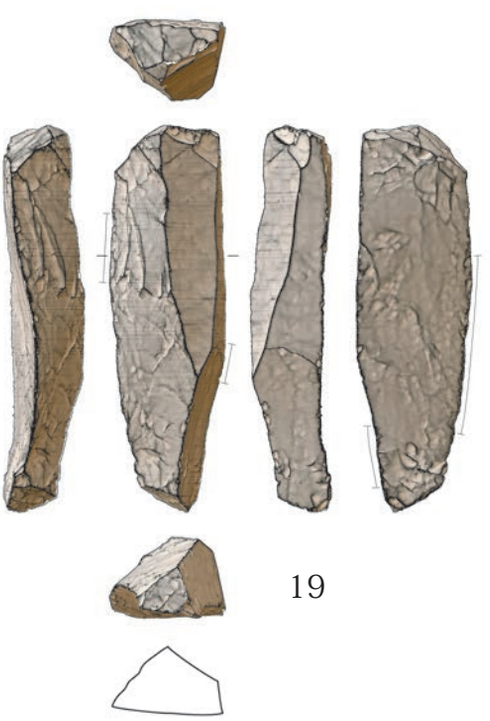
17

15

18



16



19

ファイル番号	註記番号	犬山市史史料編３ 番号	器種（旧）	時代	備考	器種（新）	事実記載	外枠 (単位: mm)			石器 (単位: mm)		
								最大長	最大幅	最大厚	最大長	最大幅	最大厚
1	H1	P29 図1-7 №2	二次加工石器	縄文	チャート	スクレイパー	赤色チャート製のサイドスクレイパー。剥片の左右両側縁部に急斜度の刃部をもつ。打面部は砕けて線状を呈し、背面は大きなポジティブコーンの一部で占められる。	37.2	27.1	9.8	37.0	26.8	9.1
2	H3	P30 図1-8 №8	使用痕のある剥片		チャート	使用痕のある剥片	赤色チャート製の剥片。剥片の左右両側縁部に微細な剥離をもつ。打面部は自然面で、背面構成は主要剥離面と同一方向および直交方向の剥離面で構成される。	28.6	28.5	10.0	28.2	28.1	9.4
3	H4	P31 図1-9 №7	二次加工石器	縄文	チャート	スクレイパー	赤色チャート製のスクレイパー。剥片の右側縁部、基端部の腹面側に角度の浅い刃部を形成する。素材剥片の打面部は二次加工により残存せず、背面構成は主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。	32.8	20.1	6.1	31.9	20.1	6.0
4	H5	P29 図1-7 №3	剥片		黒曜石	使用痕のある剥片	黒曜石製の剥片。周縁部に断続的に微細な剥離が認められる。打面部は砕けて線状を呈し、背面構成は主要剥離面と同一方向および反対方向の剥離面、および自然面で構成される。	23.4	19.3	6.6	23.2	19.1	6.0
5	H6	P31 図1-9 №4	二次加工石器		黒曜石	スクレイパー	黒曜石製のスクレイパー。小形の原石（ズリ）を素材として、その一端に二次加工を施し弧状の刃部を形成する。自然面は原礫面と風化の著しい非人工的な剥離面によって構成される。	29.5	17.6	12.6	29.2	17.6	12.3
6	H7	P29 図1-7 №5	石錐		チャート	石錐	チャート製の石錐。 剥片の尖った末端部腹面側に連続的に微細剥離が認められることから、剥片の一端を利用したドリルと推定される。素材剥片の打面は自然面で、 背面構成は主要剥離面と同一方向および反対方向の剥離面で構成される。	34.3	23.8	11.3	34.1	22.6	11.1
7	H8	P29 図1-7 №4	使用痕のある剥片		チャート	使用痕のある剥片	チャート製の剥片。剥片の周縁部に断続的に微細な剥離が認められる。打面は単剥離面で、背面構成は主要剥離面と同一方向および直交方向の剥離面で構成される。	39.0	29.2	9.1	38.8	29.2	8.9
8	H9	P31 図1-9 №6	スクレイパー		サヌカイト	スクレイパー	サヌカイト製のサイドスクレイパー。剥片の右両側縁部に刃部をもつ。素材剥片の打面部は折損しており、背面は主要剥離面と直交方向の剥離面および自然面で構成される。	41.9	27.9	7.8	41.5	27.9	7.5
9	H11	P29 図1-7 №9	スクレイパー		安山岩（サヌカイト？）	スクレイパー	サヌカイト製のサイドスクレイパー。横長剥片の基端側と末端側に二次加工を施し直線状の刃部を形成する。 素材剥片の打面は二次加工により残存せず、背面は主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。	59.0	24.7	9.8	58.9	23.6	8.6
10	H12	P29 図1-7 №6	剥片		サヌカイト？	剥片	サヌカイト製の剥片。剥片の左右両側縁に折断面がある。打面部は折損しており、背面は主要剥離面と同一方向および反対方向の剥離面で構成される。周縁にガジリ痕が認められる。	54.4	28.1	12.8	53.8	28.1	12.6

ファイル番号	註記番号	犬山市史史料編 3 番号	器種（旧）	時代	備考	器種（新）	事実記載	外枠（単位: mm）			石器（単位: mm）		
								最大長	最大幅	最大厚	最大長	最大幅	最大厚
11	H13	P30 図1-8 №9	使用痕		サヌカイト	使用痕のある剥片	サヌカイト製の剥片。周縁部に断続的に微細な剥離が認められる。打面部は砕けて線状を呈し、末端側は折損している。 背面構成は主要剥離面と同一方向および自然面で構成される。	35.9	34.8	6.8	35.9	33.2	6.8
12	H14	P30 図1-8 №6	使用痕		チャート	使用痕のある剥片	硬質頁岩製の剥片。周縁部に連続的に微細な剥離が認められる。 打面部と末端部側が折損している。 背面は主要剥離面と同一方向および直交方向の剥離面で構成される。	33.0	17.7	8.4	33.0	17.2	7.8
13	H16	P31 図1-9 №1	剥片		安山岩（サヌカイトではない）	使用痕のある剥片	チャート製の剥片。周縁部に断続的に微細な剥離が認められる。打面は単剥離面で、背面構成は主要剥離面と同一方向および反対方向の剥離面で構成される。	40.9	37.8	10.5	38.9	36.7	9.8
14	H17	P29 図1-7 №7	スクレイパー		凝灰岩	剥片	打面は単剥離面で、背面構成は主要剥離面と同一方向の剥離面および自然面で構成される。表面の風化が顕著で、背面中央部には被熱による剥落が見られる。	87.2	55.0	17.1	87.2	53.6	17.1
15	H18	P29 図1-7 №8	二次加工石器		泥質凝灰岩	二次加工石器	両面加工石器。縦長の素材の周縁から平坦剥離による二次加工が施される。風化が著しく素材剥片の状態は不明確。	90.6	35.9	17.5	90.5	35.5	17.4
16	H19	P30 図1-8 №5	剥片		チャート	剥片	凝灰岩製の剥片。打面は単剥離面で、背面構成は主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。風化が著しい。	60.5	33.7	13.9	60.0	33.5	13.1
17	H20	P29 図1-7 №1	剥片		砂岩	剥片	頁岩製の剥片。 打面は単剥離面で、背面全て自然面で占められる。風化が著しく周縁部にはガジリによる欠損が多数認められる。 背面中央部には被熱による剥落が見られる。	56.6	28.8	12.2	56.5	28.1	11.2
18	H21	P30 図1-8 №4	剥片		泥質凝灰岩	剥片	凝灰岩製の剥片。打面は単剥離面で、背面構成は主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。風化が著しい。	42.2	17.2	7.9	42.0	16.8	6.8

今井焼―成立とその生産内容―

公益財団法人瀬戸市文化振興財団　青木　修
NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク　大塚　友恵
（会員）中野　耕司

1．はじめに

本稿は、愛知県犬山市今井字宮ヶ洞に所在する宮ヶ洞古窯跡（以下、宮ヶ洞窯跡とする）から採集した遺物に関する研究ノートである。宮ヶ洞窯跡は、犬山市東部（旧今井村）に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地であるものの、発掘調査が行われていないこともあり、その実態は明らかにされていないのが現状である。ただ、今井で唯一の近世窯であることや文書類に関係する記載が確認できるなど、その存在は古くから「今井焼」として認識されていた。また、犬山市には、江戸時代後期に登場するいわゆる「犬山焼」と呼ばれる上絵付けを施した雅豊かな焼物があり、宮ヶ洞窯跡はその成立に係る窯業地として、犬山焼の創始段階であるとの見解も示されてきた。その一方で、今井焼と犬山焼では、それぞれの生産品の特徴が明らかに異なる作風を演出しており、両者が同系列の焼物であるとする考えには再検討の必要性を感じている。いずれにしても、今井焼と美術工芸品としても評価が高い犬山焼は、犬山市に所在する近世窯業における重要な位置付けにあることは言うまでもない。従って、「今井焼」あるいは「犬山焼」とはどのような焼物であるかという問いかけに対し、誤解のない説明を行う必要性が要求されるのではないかと考えている。

本稿は、採集した遺物から本窯跡の特徴と意義について明らかにしようとするものであるが、犬山焼研究につながる序章として、今井焼における生産内容と窯跡の操業年代を考古学的手法により検証する試みを行うものであり、窯跡の位置と地理的・歴史的環境、今井焼に関する研究史、そして採集遺物の紹介とその考古学的評価から構成している。（青木　修）

2．宮ヶ洞古窯跡の立地と周辺の遺跡

宮ヶ洞窯跡が所在する犬山市は、愛知県の最北端にあり、犬山扇状地の扇頂部に位置している。市東部には標高１００～２００ｍの愛岐丘陵、尾張丘陵が広がる。その裾野には犬山台地と呼ばれる低位段丘が東から西へと広がり、市の西部は木曽川の氾濫による沖積地で形成されている。犬山の地は尾張藩付家老の成瀬氏３万５千石の城下町として栄え、現在も国宝犬山城と当時の面影を残した城下町がのこる。成瀬氏は制度上は陪臣であり、尾張藩の家老に過ぎなかったが、その待遇は譜代大名に準じ、尾張藩内でも特別な存在であった。

犬山市今井は、周囲を東部丘陵に囲まれ、成沢川によって開析された沖積地に集落が広がり、現在もなお里山風景を残す地域である。この東部丘陵一帯には、古代から中世の古窯跡が確認されている。そのうち堂ヶ洞古窯跡は発掘調査が行われ、灰釉陶器生産を行っていた窯体が近接して数基あったことが分かっている。その他橋爪池古窯、割洞池古窯、一ツ橋西古窯など古窯跡があり、八

写真１　宮ヶ洞古窯跡の遠景

曽山（標高３２７ｍ）山中からも山茶碗片が採集されている。近世の古窯跡は、宮ヶ洞窯跡以外は確認されていないが、犬山城より東方の白山平山の南麓には、丸山窯がある。また、犬山市に東接する岐阜県可児市、多治見市、土岐市、瑞浪市においては、古代から現代まで連綿と陶磁器生産が行われ、美濃窯を形成している。

宮ヶ洞窯跡は舌状に延びる標高約１５５ｍの丘陵端部の尾根南向き斜面に立地している（図1、写真1・2）。宮ヶ洞窯跡が位置する南側には別の尾根筋が延び、また尾根上は畑地となっており、その北側は虎熊川によって形成された沖積地に接している。

写真２　宮ヶ洞古窯跡の現況（左斜面に立地）

遺物は斜面中腹より下方に散布しており、東に向かう程、遺物数は少ない。遺物散布範囲の西側斜面の中腹部には、現状で平坦面が確認される。

この宮ヶ洞窯跡の西には石作神社（写真3）が鎮座し、村社として地元の信仰を集めている。奉納されている陶製狛犬は『奉寄進尾州丹羽群今井村林長兵衛　元禄十弐（１６９９）年卯月吉禅日　吉次代』と刻銘がある。（大塚友恵）

3．研究史

まずは、今井焼の研究史を概観したい。

明治以前は、犬山焼を含めてその記述は少なく、研究対象としてはあまり取り上げられていない。今井焼について文献資料に初見されるのは近藤秀胤による「犬山陶器窯由来」である（※注1）。この中で、今井焼については①丹羽郡今井村の宮ヶ洞にて陶器生産を行っていたこと、②開窯については宝暦年間と、元禄宝永の頃の二説あること、③「犬山」という押印が用いられてことといった基本的な内容がすでに指摘されている。また、犬山焼の由来として今井焼が取り上げられている点から、今井焼が犬山焼の創始段階であるという認識があったと考えられる。『増補訂正工藝志料』（黒川１８８８）や『陶器類集』（高木１９００）においては犬山焼についての記載はあるものの、今井焼については述べられていない。

その後、大正年間から昭和５０年代までは、伝承と伝世品を中心とした研究が展開される時期である。１９１７年の『犬山陶器誌』において田部井鉚太郎氏が、今井焼についての伝承などを詳細に紹介している（田部井１９１７）。田部井氏は、今井焼は元禄年間に丹羽郡今井の郷士奥村傳三郎が宮ヶ洞に開窯し、二代、三代と継続したが三代目の太右衛門の死後、廃窯したとする。初代傳三郎は享保十五（１７３０）年、二代源助は延享五（１７４８）年、三代太右衛門は安永十（１７８１）年にそれぞれ没している。今井焼と伝えられる伝世品は前述の石作神社の陶製狛犬や寛保三（１７４３）年銘のある燈籠などを挙げている。その後の論考は、この『犬山陶器誌』と凡そ同様の内容が述べられており、今井の郷士奥村傳三郎に関する伝承が中心に取り上げられる。また、『尾張の古陶』においては、角印の以外の押印（尾関氏所蔵の茶壺の押印か）が提示される（原１９３０）。このような伝承中心の研究の流れの中で、１９５６年の亀井京一氏著『今井誌』（亀井１９５６）では、これまでの今井焼に関する研究が伝承をもって史実としている点を指摘し、遺物と史料によって伝承のすり合わせを試み、奥村家の家系図や今井村名寄帳をもと

写真３　石作神社の境内

に検討している。また、亀井氏は宮ヶ洞窯跡から出土した遺物にも触れ、窯跡から出土する押印のほとんどが角印であると指摘している。１９６４年の柴田貞一氏著「犬山焼陶器史」（柴田１９６４）は、生産内容から最初の陶工は東濃可児郡人であるとの可能性が示されている。以上のように、当該期においては、奥村傳三郎に関する伝承や伝世品を中心に論が展開される。亀井氏や柴田氏によって伝承の検討が試みられているも、『犬山陶器誌』を踏襲するに留まり、実証的な研究が不十分な時期であったといえる。

１９７０年代後半に入り、これまでの伝承・伝世品中心の研究から窯跡からの陶片による考察がなされ、考古資料による実証的な研究の進展がみられ、その結果を踏まえた伝世品の再検討も行われる。

佐々木健二氏によって、宮ヶ洞窯跡の踏査が行われ、採集した陶片より今井焼の生産内容が示され、宝暦年間開窯、安永末年廃窯とする伝承が有力視された（佐々木１９７７）。佐々木氏は今井焼の時期を１８世紀後半代に想定し、その理由として、元禄期には豊富にあった器種が少なくなること、元禄期からの系譜上にある鉄釉徳利、水注などの器種と、１９世紀以降に出現するとされるへこみ三角徳利などの新旧の様相を挙げている。また、今井焼が雑器中心であることから、当窯を藩の関与を考慮しながらも藩内の民需を目的とした雑器生産窯と位置付けた。浅井藤雄氏著の「犬山焼のすばらしさ」では今井焼が犬山焼の第Ⅰ期に編年される（浅井１９７７）。また、１９７９年には犬山焼今井窯として油壷など８点が市指定文化財に登録されている。１９８０年には愛知県陶磁資料館にて「よみがえる華麗な世界犬山焼」展が開催され、その図録において江崎氏が宝暦年間以前とされる伝世品について、瀬戸・美濃の製品と明確に区別できず創窯期を解明する積極的な資料とはなりえないと指摘している（江崎１９８０）。その後福井県陶芸館、犬山市文化史料館、可児市郷土歴史館などで犬山焼を取り上げた企画展が開催され、今井焼についても紹介されている。また、新たな資料として名古屋城三の丸遺跡や尾張藩上屋敷遺跡での今井焼とされる遺物の出土例が報告され、より広域な流通の可能性が示唆される（江崎１９９７）。

近年では、仲野泰裕氏が石作神社の陶製狛犬について元禄年間頃に美濃において焼かれた作品群の一例であると指摘し、また今井焼を摺り絵技法の最終末段階に位置するとして注目している（仲野１９９９）。

以上、今井焼の研究史を概観したが、前出の文献を踏襲している部分も多く、研究は緒に就いたばかりである。研究史において論点となっているのが、操業時期である。操業開始時期は伝承による部分が多く、それを裏付けるような文献資料の存在はいまだ確認されていない。操業期間は、当初から『犬山陶器誌』をはじめ、郷土奥村傳三郎の伝承をもとに語られていたが、宮ヶ洞古窯跡での採集資料が再検討され、宝暦年間が妥当とされている。しかし初代奥村傳三郎は享保年間には没しており（※注2）、宝暦年間開窯では初代奥村傳三郎が開窯したという伝承は当

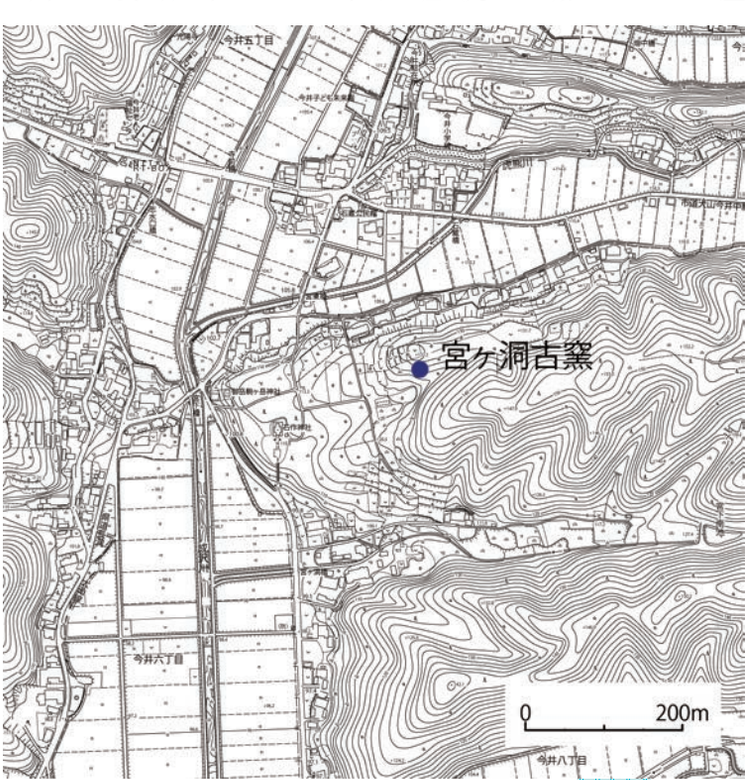


図１　宮ヶ洞窯跡　位置図

てはまらず、これらの伝承をどう評価するかは今後の課題であるといえる。また今井焼と犬山藩の関わり、「犬山焼」の位置づけなど問題点も残る。これらの課題を解決するために、採集資料の限界はあるが、伝世品を含めた今井焼とされる資料の精査をしていく必要がある。（大塚友恵）

4．宮ヶ洞窯跡採集資料の紹介

ここでは、宮ヶ洞窯跡から採集した遺物について紹介する。遺物の採集は、中野耕司、中野拳弥、岩田紗絵、大塚友恵、青木　修の５名により、平成２５年１月から平成２６年２月の期間に5日間実施した。採集遺物は、コンテナ（P－２７）に換算して約4箱分の量に相当し、陶器と窯道具に分類可能であり、前者は碗類（丸碗、小碗、せんじ、筒形碗）、皿類（摺絵皿、灯明皿、皿）、鉢・鍋類（片口、植木鉢、行平、鍋、鉢）、瓶・壺類（徳利、汁次、花瓶、尿瓶、有耳壺）、その他（蓋、灯明具、香炉）、後者は、薬研車、筒ドチ、エンゴロ、輪ドチ、ヘダテ、棚板などである。ただ、多くは破片資料のため、全体の形状を示す個体は少なく、器種名を特定できない資料も少なくない。なお、比較的多く採集できた遺物は、窯道具類を除けば、片口、徳利、有耳壺である。

以下、各器種について特徴を記す。法量は必要に応じて本文中にて扱うが、多くは計測表を参照されたい。

（1）丸碗（1～7）　飴釉（1～6）と鉄釉（7）のものに分類でき、後者はやや小形の器形である。口縁部及び高台周辺の断片的な資料が多いため、各部位を総合的に紹介する。削り出し輪高台を有し、体部下半は丸く、体部上半から直立し、口縁部は尖り気味に仕上げられている。体部下半は回転ヘラナデ、口縁部周辺は回転ナデにより丁寧な調整が施されている。釉薬は、高台周辺を除いて漬け掛けされ、飴釉のものは透明感のある緑褐色を呈する。

（2）小碗（8）　灰釉のものが1点のみ確認できた。基本形状及び調整技法等は丸碗に共通する。体部の器壁は薄く仕上げられているのに対し、底部のそれは厚くなる点が指摘できる。釉薬は、高台周辺を除いて、灰釉が漬け掛けされ、明緑色を呈する。

（3）筒型碗（9）　底部周辺の資料のため詳細は不明であるが、体部が直立することから筒型碗とした。丸碗に比べて高台が低い形状である。高台を除いて鉄釉が施されている。

（4）せんじ（10）　1点のみ確認できた。体部中段で屈曲し、口縁部にかけて直立する点が特徴である。高台の成形は丸碗に共通するが、高台の内側は深く、中央部付近では浅く削り込まれている。釉薬は、高台周辺を除いて灰釉が漬け掛けされ、透明感のある明緑色を呈する。

（5）拳骨茶碗（11～14）　体部の二方を指で押さえ、凹ませる点が特徴である。底部中央付近を凹ませ、幅広の高台を成形し、体部は直立させ、筒形を呈する。体部外面には成形によるロクロ目が明瞭に確認できる。12・13の資料には、高台の外面に押印が施されている点が特徴である。押印は、1．0㎝×1．5㎝の四角に「犬山」の文字を縦に配列し、「犬」の文字は、点の位置が文字の中段に配されている。釉薬は、器全体に鉄釉を施した後、高台外端部のみ拭き取りが行われている。なお、押印は施釉前に施されている。

（6）摺絵皿（15）　口縁部の破片資料のため、体部内面の状況が確認できず、詳細は不明であり、別器種の可能性もある。回転ナデによる成形で、体部下段と中段には強いヘラ削りによる明瞭な稜線が一周している。釉薬は、口縁部及び内面には灰釉が施されているが、体部下半は露胎である。

（7）灯明皿（16・17）　2点出土しているが、いずれも焼成が弱い。16は無釉であるのに対し、17は鉄釉が施されている。底部は、その内側を削り込み、碁笥底状に成形されている。体部下半は回転ヘラナデ調整が施され、口縁部の外反はほとんどない。釉薬は、底部周辺を除いて施されている。

（8）皿（18・19）　高台周辺の資料のため、器種名を特定できないが、体部が大きく開いて立ち上がることから皿類に分類されると判断した。ヘラ削り調整された底部外面に、断面三角形の付高台を有し、

高台は鋭利な工具でアーチ状に切り取りが行われている。19では高台の切り取りが3か所に確認できる。いずれも無釉であるが、胎土の色調は、18が灰白色、19は黄白色を呈する。

（9）鉢（20～22）　口縁部（20）と底部（21・22）の資料であるが、異なる器種の可能性もある。20は、体部下半から口縁部にかけて直立し、口縁上端部には平坦面が成形されている。口縁部を強く押さえている。内面は平滑であるのに対し、外面はロクロ目が明瞭に確認できる。体部下端を除き飴釉が施されている。21・22は、底部内面を削り込み、碁笥底に成形している。体部下半付近は回転ヘラナデ調整が施されている。底部外面には輪ドチが付着している。釉薬は、底部周辺を除いて、飴釉が施されている。

（10）片口（23～37）　採集した資料では最も多いが、全体の形状を復元できる個体はないため、各部位を総合的に判断して紹介する。回転ヘラ削り輪高台を有し、その端部は幅広に仕上げられている。底部から緩やかに立ち上がり、体部上半はほぼ直立し、口縁部は折り返して玉縁状を呈する。口縁上端部は平坦面が成形されている。注ぎ口（52・53）は、口縁部の一か所をU字状に切り取り、粘土板を樋状にして貼り付けられている。体部下半は回転ヘラナデ、体部上半から口縁部は回転ナデにより調整が施されている。釉薬は、高台周辺を除いて飴釉が施され、概ね緑褐色を呈する。ただし、34は灰釉が施されている。

（11）植木鉢（38）　1点のみであるが、混入品の可能性も否めない。底部中央の穿孔は確認できなかったが、体部形状から植木鉢と判断した。削り出し輪高台を有し、その端部は幅広に仕上げられている。体部は直立し、口縁部は水平方向へ屈曲するが、上端部は平坦に仕上げられている。高台にはアーチ状に切り取りされている。高台周辺と口縁部を除く内面以外は灰釉が施されている。釉薬の発色は、他の灰釉製品と異なり透明感が無い点が指摘できる。

（12）鍋（39）　口縁部の破片資料である。体部はロクロ回転により薄手に仕上げられている。口縁部には山形の釣手が手捏ねにより付設され、棒状の器具により三か所に穿孔が施されている。釉薬は、内外面に錆釉が施されている。

（13）行平（40）　注ぎ口と口縁部付近の資料である。体部上半から内向して口縁部に至り、口縁端部の内側には蓋の受部が成形されている。体部は、回転ナデにより薄く丁寧に仕上げられている。注ぎ口は、口縁部下を断面U字状に切り抜き、粘土板を樋状にして手捏ねにより貼り付けられている。注ぎ口の上部には、剥離痕が認められ、把手が付設されていたと考えられる。釉薬は、外面に鉄釉が厚く施されているのに対し、内面は錆釉が薄く確認できる。なお、蓋の受部は露胎となっている。

（14）徳利（41～55、57・58、76～78）　底部と胴部、口縁部周辺の資料があるが、全体を概観できない。徳利の範疇に含まれるが、形態の異なる個体があるため、形状の類似する部位ごとに紹介する。41～44は、口縁部である。細い頸部と口縁部は折り返して玉縁状を呈するものもある。肩部には櫛描による沈線が一周している。釉薬は、飴釉が施されている。45～52は、削り出し輪高台を有するものである。52はやや大形に分類される。釉薬は、飴釉が施されている。53～55は、「高田徳利」あるいは「貧乏徳利」と呼ばれるもので、底部を削り込み、碁笥底状に成形されている。高台の端部は、幅広に成形されている。体部の立ち上がりは強く、細身の胴部に仕上がる。釉薬は、底部付近を除き灰釉が施されている。57・58は、平底で胴部下半に明瞭な稜線が一周している。資料から確認できていないが、胴部を凹ませている可能性が高い。底部から胴部下半はヘラナデにより調整されている。底部外面に輪ドチが付着している。釉薬は、底部外面を除いて飴釉が施されている。76～78は、胴部下端に明瞭な稜線が一周し、胴部は垂直方向へ立ち上がる。77は、削り出し輪高台、76・78は付高台の可能性が高い。釉薬は、飴釉が施されているが、内面は露胎である。

（15）汁次（56）　1点のみ確認できた。内面に施釉が認められる点が特徴である。削り出し輪高台を有し、徳利に比べて体部の立ち上がりが強い。体部下半には後付けによる把手が確認できる。釉薬は、底部周辺を除いて錆釉が施されている。

（16）花瓶（59～62）　大形（59・60）と小形（61・62）に分類可能であるが、全体の形状を示す資料は無い。糸切未調整の底部を有し、胴部は大きく膨らみ、頸部から口縁部にかけては大きく開く形状を呈する。60には、胴部上段に突器が二か所に付設されている。成形はロクロ回転を利用して、底部から口縁部まで水挽きされている。釉薬は、底部内外面を除いて鉄釉が漬け掛けされている。

（17）尿瓶（63・64）　胴部と把手の破片資料である。削り出し輪高台を有し、胴部上段に最大径を測る。回転ナデにより成形し、回転ヘラ削りにより胴部上段まで調整が施されている。把手は、粘土紐から手捏ねにより成形し、断面は長軸1．7㎝の楕円形を呈する。釉薬は、飴釉が底部周辺を除く内外面に漬け掛けされている。ただし、把手は前面に鉄釉が施されている。

（18）有耳壺（65～75）　口縁部と底部周辺の資料であり、全体の形状は不明である。65・66は、ヘラ削り調整の施された平底で、65には底部外縁に沿って細い沈線が一周し、「犬山」の押印が施されている。釉薬は、底部外面を除いて飴釉が施されている。67～71は、肩部から口縁部の資料で、粘土紐により耳部が二か所に付設されている。ただ、耳部が確認できない資料もある。頸部は垂直方向へ短く立ち上がり、口縁上端部には平坦面が成形されている。肩部には櫛描文が認められるもの（67・69・71）がある。釉薬は、飴釉が施されているが、口縁上端部は拭き取りが施されている。72～75は、高台径が11㎝前後のものである。75は、底部外面に糸切痕が認められ、付高台の可能性が高い。

（19）蓋（79～84）　いわゆる落し蓋と呼ばれる形態である。大形と小形のものに分類され、大形のもの（79・80）は有耳壺に伴う。糸切未調整の平底で、体部から口縁部にかけて大きく外反する。79・80・89の笠部中央には、ツマミが確認でき、80は円柱状を呈する。釉薬は、88・89の資料で飴釉が施され、他は無釉と判断した。

（20）灯明具（85～88）　受皿と台部（芯立）がある。受皿の底部は、中央付近を削り込み、碁笥底状に成形されている。台部は、皿の内側に接合される。回転ナデにより成形され、口縁部は内側に折り返され、上端部には平坦面が成形されている。釉薬は、底部周辺を除いて鉄釉が施されている。

（21）香炉（89・90）　筒形に分類されるものである。回転ヘラ削りの施された底部の外面には手捏ねにより三足が付けられる。体部は直立し、口縁部は内側方向へ突出し、上端部には幅広の平坦面が成形されている。体部は回転ナデにより調整され、内面にはロクロ目が明瞭に残る。体部には、丸鑿状の工具により半菊文が施されている。釉薬は、底部周辺と体部内面を除いて鉄釉が施されている。

（22）薬研車（91）　直径19．2㎝、厚さ1．6～2．7㎝を測る。粘土板を円形に成形し、ヘラナデにより調整が施されている。中央には一辺2．1㎝の方形の穿孔が認められる。釉薬は、前面に錆釉が施されている。外縁付近には使用痕が認められ、本窯跡で窯道具として利用された可能性が高い。

（23）窯道具類（92～103）　筒ドチ（92～94）、匣鉢（95～97）、輪ドチ（98）、ヘダテ（99・100）、棚板（101～103）がある。筒ドチは、ロクロ回転により成形し、底部は糸切り後、鋭利な工具で切抜き、手捏ねにより三足が付けられている。匣鉢は、大形のもの（95・96）と小形のもの（97）がある。糸切り未調整の平底で、体部は垂直に立ち上がる。底部は、内側から強く押さえて丸底に成形している。器表面には回転ナデによる凹凸が明瞭に確認できる。底部内面には、鉄釉の碗類と思われる高台が付着している。輪ドチは、粘土紐を輪状にして成形する。碗類の焼成に使用される場合も

ある。ヘダテは、砂粒の多い粗い胎土が利用され、手で握って成形されるため指圧痕が認められる。棚板は、一辺16㎝前後、厚さ2㎝前後である。101は、直径9.5㎝の高台痕とその裏面には線刻が施されている。（青木 修）

5　窯跡の特徴と意義

最後に、本窯跡に関する所見をまとめることにする。前述のとおり、窯跡における発掘調査が実施されていないため遺構に関する情報は皆無であるが、現況地形から見る窯跡は、丘陵尾根と谷底の高低差が少なく、西へ延びる丘陵の南向き斜面に展開すると予想され、盗掘により攪乱されているとは言え、窯体は比較的良好に残存しているものと考えられる。ただ、窯体の位置や規模などは特定しえないが、斜面の中段付近には平坦面が確認でき、工房跡の存在も残されている。

採集した遺物は、碗類、皿類、鉢類、瓶・壺類、その他と窯道具類に分類され、江戸時代中期おける瀬戸・美濃窯の生産器種につながる内容で、日用品の量産を主眼とした構成であり、特殊品と判断される器種は確認できなかった。遺物量では、片口、徳利、有耳壺が多く、小皿類は少ない傾向が示されたが、小皿類の代表的な器種である摺絵皿は、疑わしい破片資料のみであり、18世紀前半まで量産された輪禿皿は確認できなかった。碗類では、丸碗・小碗をはじめ、18世紀の第3四半期に登場するせんじや拳骨茶碗などの器種が認められた。釉薬は、飴釉と鉄釉、灰釉などが採用されている。特筆すべきは、拳骨茶碗の高台端部に施された「犬山」の押印である。有耳壺の底部にも認められたが、すべて同じ意匠によるもので、「犬」の変形文字を採用した点の意味するところは今後の課題として引き続き検証していきたい。鉢類では、飴釉の片口が量産され、底部の法量値から大小の器形が想定される。植木鉢は混入品の可能性も否定できなかったが、江戸時代中期以降、当時の流行品として江戸へ向け大量に消費された器種の一つでもある。瓶・壺類では、徳利と有耳壺が量産され、徳利は形態の異なる器種が認められた。いわゆる「高田徳利」あるいは「貧乏徳利」と呼ばれる器種には、灰釉が、その他の器種には総じて飴釉が採用されている。花瓶は、大小の器形があり、いずれも鉄釉が採用されている点に特徴がある。有耳壺も量産器種のひとつであり、大小の器種が存在し、飴釉のものが多い。その他、有耳壺に伴う蓋、灯明具、香炉などがある。灯明具は、18世紀中頃まで量産される器種である。香炉は、体部に半菊文が施され、18世紀中頃に見られる特徴的な文様を伴う器種である。窯道具として特筆すべきは、薬研車である。外縁部には使用痕が認められ、釉薬の調合などに利用されたとも考えられる。器種の成形は、ロクロ回転を利用し、底部から体部・胴部下半までは回転ヘラ削りあるいはヘラナデを多用している。また施釉方法は漬け掛けを基本とし、総じて安定した発色であり、成熟した技法が用いられていたと判断できる。

以上、遺物の所見から、瀬戸・美濃窯の編年に当てはめて考えてみると、各器種における型式学的な差異は比較的少ないと判断できる。また、編年の基準となる器種として、丸碗、せんじ、徳利、灯明具、香炉を取り上げても、連房式登窯第7小期、18世紀中葉を中心とする時期に帰属するものと考えられる。ただ、せんじは第8小期の様相も少なからず認められ、18世紀後葉の早い段階とするべきかもしれない。その一方で、第5小期から第6小期、17世紀後葉から18世紀前葉と判断される器種は今のところ確認できなかった。従って、本窯跡の操業は18世紀中葉から18世紀後葉までに相当し、少なくとも元禄年間の操業は認められないと断言できる。また、今井の郷士奥村家が窯の操業に大きく関与したと仮定すれば、二代源助の可能性も残されるが、やはり中心は三代太右衛門であり、安永十年（1781）に没した後廃窯したとする点も考古学的所見から概ね妥当である。

「今井焼」に関して、ここで提示した内容は、資料的な制約もありすべての問題点を解決できたわけではないと承知しているが、こうした考古学的な視点から出土遺物を検証し、その所見を積み重ねることにより、「今井焼」の実態解明につなが

ると確信している。加えて本稿を一読いただき、多くの方々からのご教示を願いたいとも考えている。また、将来的に窯跡の発掘調査が行われることになり、詳細な結果が得られることを期待したいが、文献資料の再検証も含めた継続的な研究に取り組む姿勢こそ、犬山市が誇る「犬山焼」における普及活動につながるものと考えている。（青木 修）

本稿における写真はすべて中野耕司による。

※注1：原史料は年不詳。『犬山市史近世下』（犬山市編、1999）より引用。近藤秀胤は天保元（1830）年生。嘉永四（1851）年頃から犬山焼製陶業に携わる。明治二十二（1889）年死去。

※注2：初代奥村伝三郎は享保十五（1730）年、二代源助は延享五（1748）年に死去したと伝えられ、今井光陽寺にはその墓碑も残る。また、光陽寺に残る嘉永年間に記された『日記過去帳』にも同様の内容が記載されていることを同寺住職よりご教示頂いた。

参考引用文献
黒川真頼、1888、『増補訂正工藝志料』巻三、有隣堂
高木如水、1900、『陶器類集』、青木嵩山堂
田部井鉚太郎、1917、『犬山陶器誌』、尾関作十郎
原 文次郎、1929、「犬山の道平」『陶磁』第三号 pp21-25、陶磁器研究会
原 文次郎、1930、『尾張の古陶』、萬里閣書房
可兒枡太郎、1936、『日本ラインの犬山』、犬山町保勝会
藍田力蔵、1936、「日本陶工傳〈犬山地方〉」『陶器講座』第12巻、pp154-156、雄山閣
陶器全集刊行会、1939、『日本古陶銘款集 東海・甲信編』、宝雲舎
亀井京一、1956、『今井誌』、亀井京一
小林 宗一、1958、「犬山焼」『陶説』、pp24-27、日本陶磁協会
佐藤進三、1959、「乾山展と犬山乾山」『陶説』、pp45-48、日本陶磁協会
柴田貞一、1964、「犬山焼陶器史」『地方史研究』72、pp14-26、地方史研究協議会
亀井京一、1976、『犬山市の文化財』第2集、犬山市教育委員会
佐々木健二、1977、「まぼろしの犬山焼」『名古屋民芸』pp4-5、名古屋民芸協会
浅井藤雄、1977、「犬山焼のすばらしさ」『いちのみや』市立豊島図書館館報第141号、pp1-3、一宮市立豊島図書館
佐々木健二、1978、「犬山焼（2）」『名古屋民芸』、pp3-5、名古屋民芸協会
浅井藤雄、1979、「みなおされた犬山焼」『いちのみや』市立豊島図書館館報第155号、pp1-3、一宮市立豊島図書館
永竹 威・小野正人他、1979、『陶器講座』第4巻日本Ⅳ江戸後期、雄山閣出版
江崎 武・柴垣 勇、1980、『よみがえる華麗な世界 犬山焼』、愛知県陶磁資料館
江崎 武、1982、「尾張・三河のやきもの」『日本やきもの集成』2 東海甲信越、pp116-118、平凡社
福井県陶芸館、1989、『幕末尾張の赤絵と雲錦手 犬山焼展』、福井県陶芸館
尾関作十郎、1989、「犬山焼展に寄せて」『日本陶磁の美 犬山焼の精華』、犬山市文化史料館
梅本 博志ほか、1990、『名古屋城三の丸遺跡（1）』、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集、愛知県埋蔵文化財センター
犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会、1990、『犬山市史』史料編五近世下、犬山市
東京女子大学文理学部民俗調査団編、1995、『今井の民俗―愛知県犬山市―』、東京女子大学文理学部民俗調査団
可児市教育委員会編、1997、『犬山焼名品展 江戸時代の呉州赤絵と雲錦手』、可児市郷土歴史館
犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会、1997、『犬山市史』通史編上、犬山市
仲野泰裕、1999、『企画展 犬山焼―浅井コレクション』、愛知県陶磁資料館
仲野泰裕、1999、「尾州犬山焼―呉州手写・雲錦手の華麗な競演―」『陶説』第555号、pp15-24、日本陶磁協会
愛知県史編さん委員会、2007、『愛知県史別編窯業3 中世・近世常滑系』、愛知県

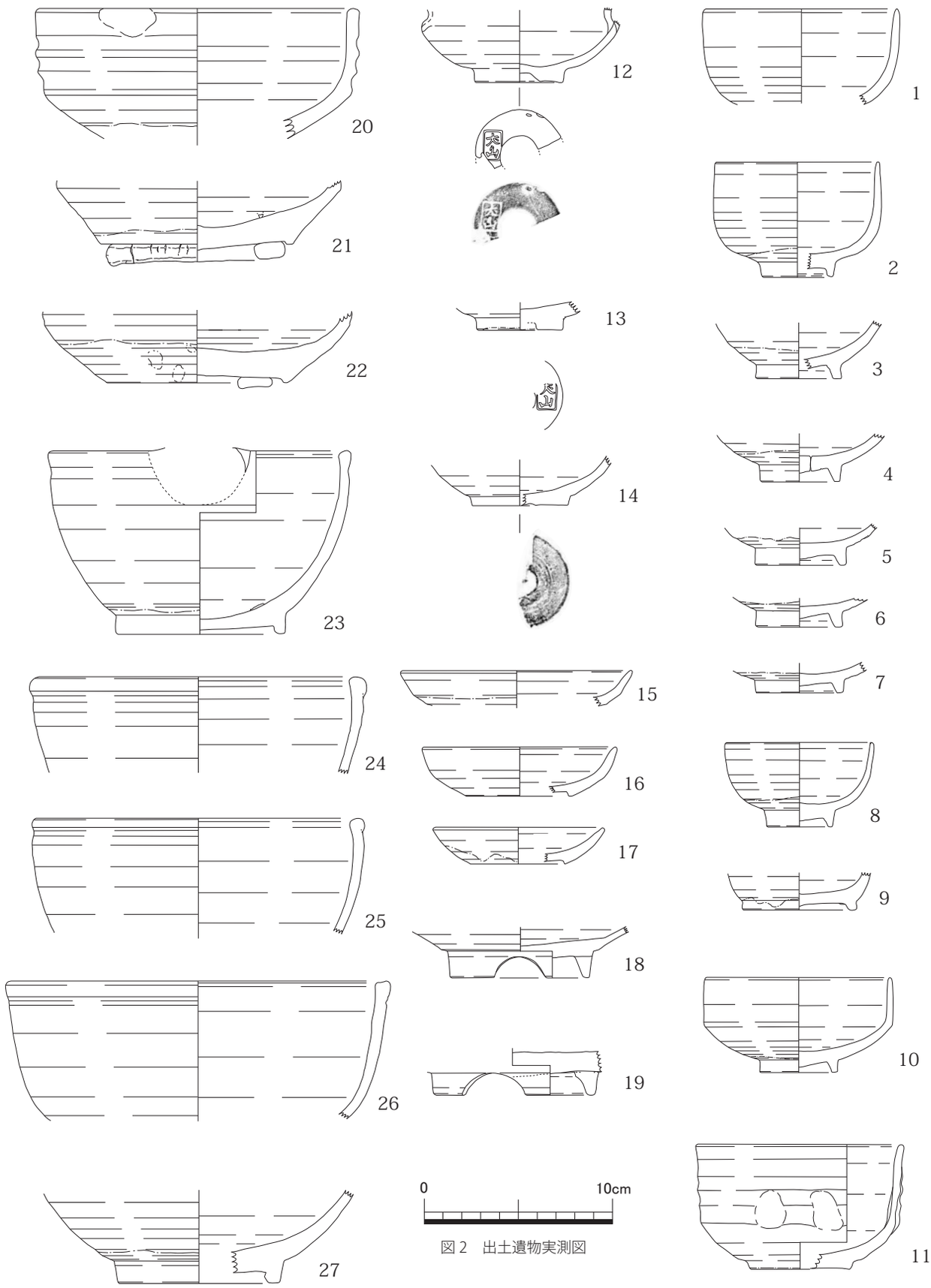

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

図 2　出土遺物実測図

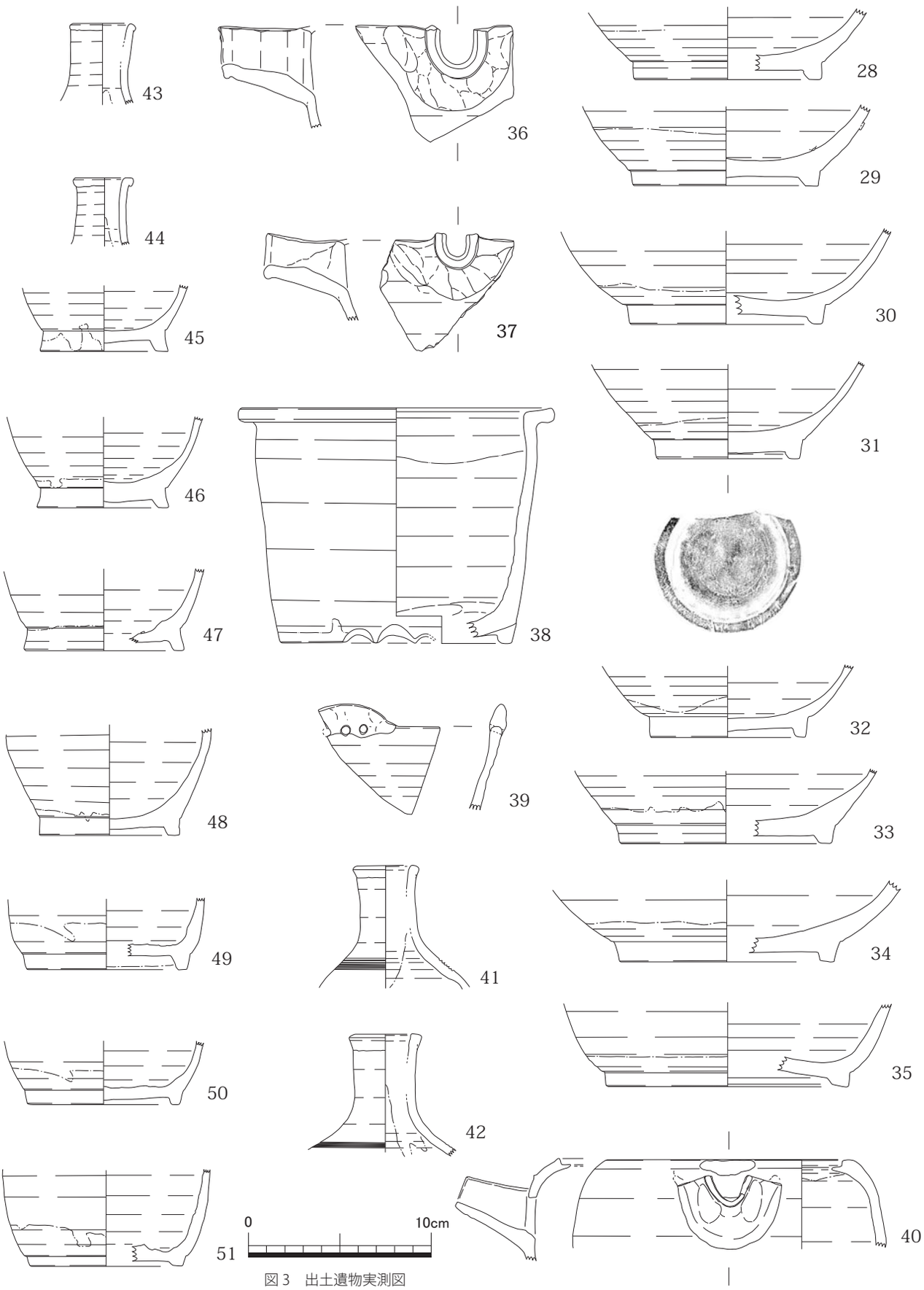

43
36
28
29
44
37
30
45
31
46
38
47
32
39
48
33
49
41
34
50
42
35
51
40
0
10cm

図3　出土遺物実測図

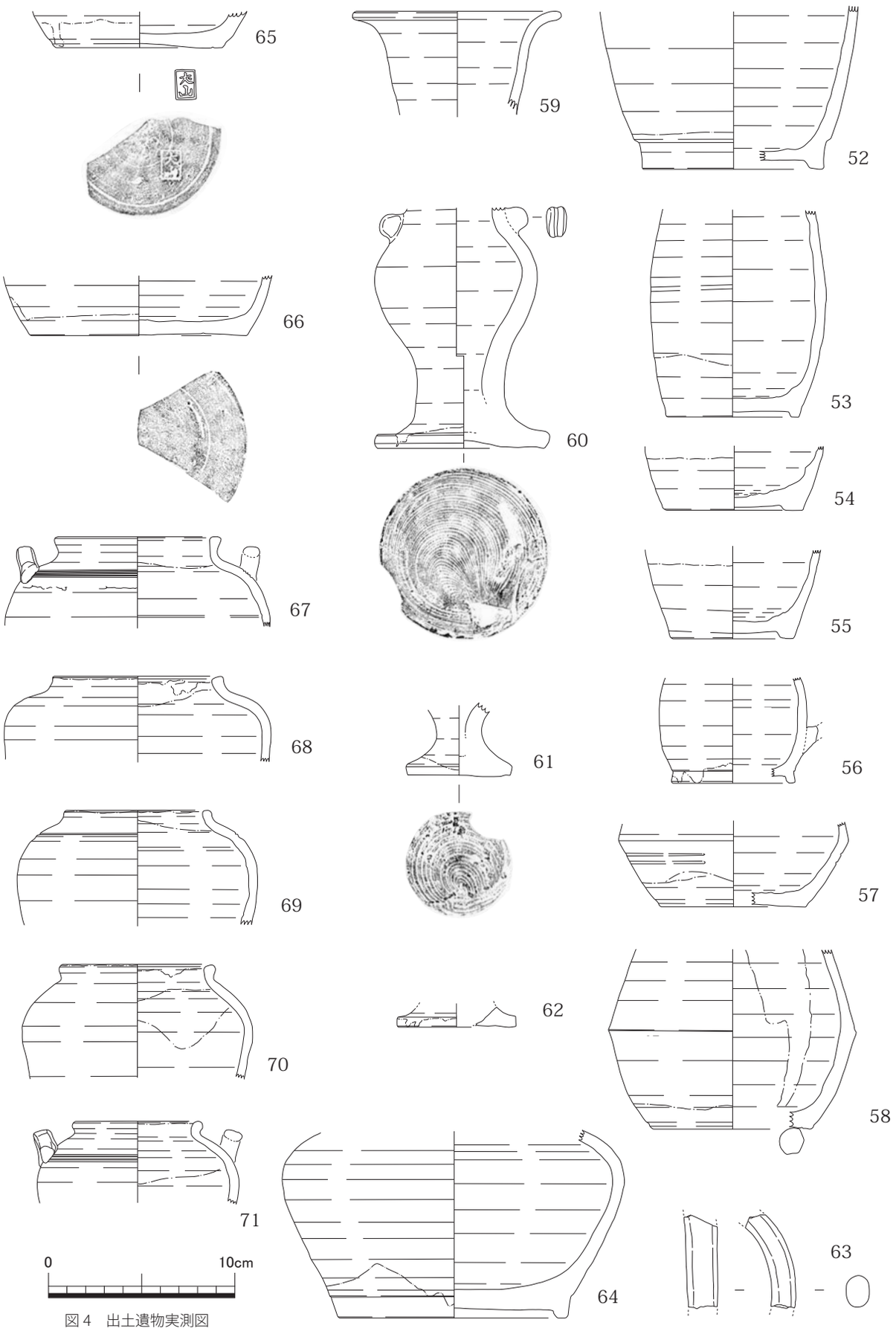


図４　出土遺物実測図

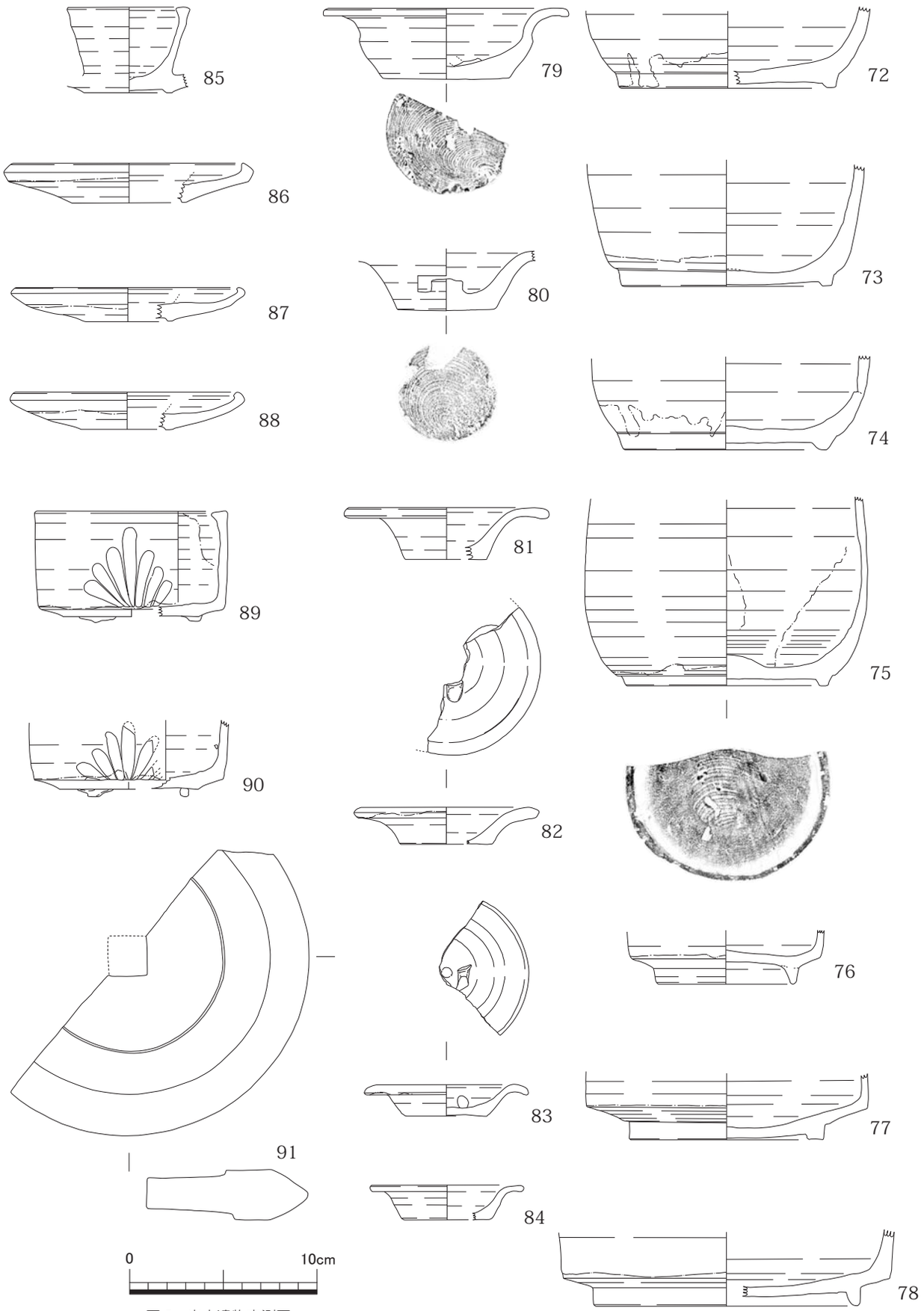


図5　出土遺物実測図

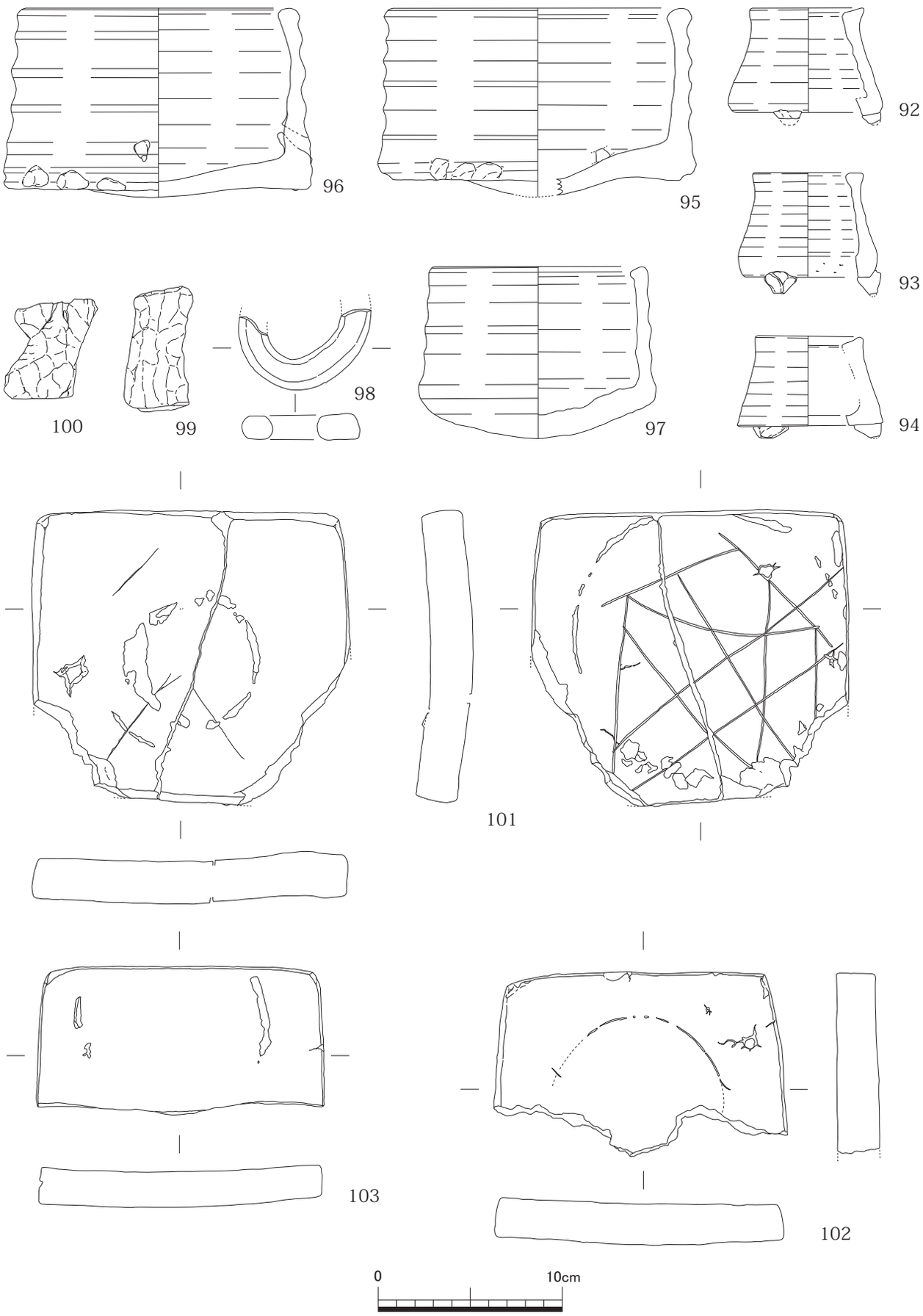


図 6　出土遺物実測図

表１　出土遺物計測表

No.	器種	釉薬	法量(cm)					備考
			口径	底径	高台径	器高	胴径	
1	丸碗	飴釉	10					
2	丸碗	鉄釉	8.7	4.2	3.7	6.2		
3	丸碗	飴釉		4.6	4.5			
4	丸碗	飴釉		4.5	4.2			
5	丸碗	飴釉		4.9	4.8			
6	丸碗	飴釉		4.7	4.5			
7	丸碗	飴釉		4.8	4.6			
8	小碗	灰釉	7.7	3.8	3.4	4.5		
9	筒型碗？	飴釉		6.1	6.0			
10	せんじ	灰釉	9.8	4.2	4.2	5.1		
11	摯骨茶碗	鉄釉	11	5.8	5.3	6.7		
12	摯骨茶碗	鉄釉		5.0	4.7			「犬山」の押印
13	摯骨茶碗	鉄釉		4.8	4.5			「犬山」の押印
14	摯骨茶碗	鉄釉		5.3	5.0			
15	摺絵皿？	灰釉	12					
16	灯明皿	無	10		5.6	2.6		
17	灯明皿	鉄釉	9.0	5.1	2.0			
18	皿	無		7.7	7.4			
19	皿	無		8.8	8.5			
20	鉢	飴釉	17.0					
21	鉢	飴釉			10			
22	鉢	飴釉			9.6			
23	片口	飴釉	16	9.1	8.9	9.9		注ぎ口欠
24	片口	飴釉	17					歪みあり
25	片口	飴釉	17					
26	片口	飴釉	20					
27	片口	飴釉		9.1	8.6			
28	片口	飴釉		10	10			
29	片口	飴釉		10	10			内面に高台痕
30	片口	飴釉		11	11			
31	片口	飴釉		8.1	7.8			
32	片口	飴釉		8.8	8.4			
33	片口	飴釉		12.0	12			
34	片口	灰釉		13	12			内面にトチ痕
35	片口	飴釉		14	13			高台付近露胎
36	片口	飴釉						注ぎ口
37	片口	飴釉						注ぎ口
38	植木鉢	灰釉	17.0		13	13.0		混入品の可能性あり
39	鍋	錆釉						
40	行平	鉄釉	13.0				17	内面は錆釉
41	徳利	飴釉	3.4					櫛描文
42	徳利	飴釉	3.7					櫛描文
43	徳利	飴釉	3.4					
44	徳利	飴釉	3.2					
45	徳利	飴釉		6.7	7.0			内面露胎
46	徳利	飴釉		6.9	7.2			
47	徳利	飴釉		8.4	8.8			内面露胎
48	徳利	飴釉		7.7	7.6			内面露胎
49	徳利	飴釉		9.1	8.7			内面露胎
50	徳利	飴釉		8.7	8.4			
51	徳利	飴釉		8.7	8.3			

No.	器種	釉薬	法量(cm)					備考
			口径	底径	高台径	器高	胴径	
52	徳利	飴釉		10	9.8		14	
53	徳利	灰釉			7.1		9･5	
54	徳利	灰釉			6.4			
55	徳利	灰釉			6.5			
56	汁次	飴釉		6.6	6.6		8.0	内面施釉
57	錆徳利	錆釉		7.8			12	
58	錆徳利	錆釉		8.6			13	
59	花瓶	鉄釉	11.0					
60	花瓶	鉄釉			8.9		8.8	
61	花瓶	鉄釉			5.5			
62	花瓶	鉄釉			6.3			
63	尿瓶	鉄釉						把手1.7㎝×1.3㎝
64	尿瓶	飴釉		13	12		19	内面施釉
65	有耳壺	飴釉		9.0				「犬山」の押印
66	壺	飴釉		12				
67	有耳壺	飴釉	8.8				14	櫛描文
68	有耳壺	飴釉	9.1				14	
69	有耳壺	飴釉	7.8				13.0	櫛描文
70	有耳壺	飴釉	8.1				12	
71	有耳壺	飴釉	6.8				11	櫛描文
72	有耳壺	飴釉		12.0	12			高台付近釉の拭き取り
73	有耳壺	飴釉		12	11			
74	有耳壺	飴釉		12	11			
75	有耳壺	飴釉		11	11		15	
76	徳利	飴釉		7.9	7.3		11	
77	徳利	飴釉		11	10		15	
78	徳利	飴釉		14	14.0			
79	蓋	無	13.0	6.8		3.8		
80	蓋	錆釉		5.2				
81	蓋	無	11	4.3		2.8		
82	蓋	飴釉	9.9	5.0		2.0		
83	蓋	飴釉	8.9	4.3		1.7		
84	蓋	無	8.2	4.6	1.9			
85	灯明具	飴釉	5.4	4.8				
86	灯明具	飴釉	12	6.1		2.2		受皿の数値
87	灯明具	飴釉	12	4.8		1.9		受皿の数値
88	灯明具	飴釉	12.0	4.9		2.0		受皿の数値
89	香炉	飴湯	10	7.2		6.0		三足　半菊文
90	香炉	飴釉		7.4				三足　半菊文
91	薬研車	錆釉						直径19.2㎝
92	筒ドチ		6.1	7.9			8･4	三足
93	筒ドチ		5.9	6.8		6.7		三足
94	筒ドチ		5.8	7.9		5.7		三足
95	匣鉢		16	16		10		丸底
96	匣鉢		15.0	16		10		丸底　体部下半に穿孔
97	匣鉢		12	13		9.5		丸底
98	輪ドチ		7.2					厚さ1.4㎝
99	ヘダテ					6.6		直径3.0～3.5㎝
100	ヘダテ					5.2		直径3.0～3.5㎝
101	棚板							幅17.3㎝×16.0㎝　厚さ2.4㎝
102	棚板							幅15.7㎝　厚さ2.2㎝
103	棚板							幅15.6㎝　厚さ2.0㎝

邇波里昆虫研究ノートその①

犬山の「虫送り」から考えるイネ害虫の今昔

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク　奥野絵美

1．イネ害虫の研究史

昆虫は地球上で最も種群の多い生物群で、世界に約１，０００万種存在するとも考えられており（森本１９８６）、その食性および生息環境は非常に多種多様である。昆虫の中には、イネを加害する種類が存在しているが、それらは日本における水田稲作農耕の成立と展開を考える上で非常に重要であるため、古くから昆虫考古学の研究対象として注目されてきた（日浦ほか１９８４）（宮武１９９４）（森１９９０）（森１９９６）（森１９９９）。今回、本稿では犬山市五郎丸地区で行われた害虫駆除を願う農村行事である「虫送り」を紹介するとともに、イネの害虫の今と昔の様相について一考察を行う。

2．犬山市五郎丸地区「虫送り」の記録

日本の民族風習である「虫送り」がいつ頃開始されたのかは定かでは無いが、江戸時代には北海道を除く全国各地で行われていたとされる（伊藤２００１）。現在では多くの地域で「虫送り」行事は消滅しつつあるが、犬山市内では、「虫送り」を今でも毎年行っている地区も多い。NPO法人ニワ里ねっとでは、市内文化遺産のデジタルアーカイブ事業の一環として平成２５年７月７日に、五郎丸神明社（犬山市五郎丸）で行われた「虫送り」の悉皆調査を行った。五郎丸で行われた「虫送り」行事の取り仕切りを行うのは地区４町内の氏子総代であり、行事の参加者は地区の小学生たちである。五郎丸地区では、「虫送り」のことを「ウンカ送り」又は「オンカラカミ」とも呼称しており、疫病よけの祭事である「ダンダンモウセ」と同時に行っているそうである。「虫送り」の怨霊はサネモリと呼ばれているが、これはイネを害する怨霊として知られる平安末期の武将、斎藤実盛のことと考えられる。

以下に五郎丸地区「虫送り」の概略を示す。まず、全員で地区の氏神である五郎丸神明社で神事を行った後、北回りと南回りの２組に分かれて疫病送りの巡行を行う（写真１）。北回りの組が虫送りとダンダンモウセの人形、南回りの組がダンダンモウセの人形を持ち、鐘や太鼓を鳴らしながら約１時間かけて五郎丸地区の外周を回る（写真２）。このうち「虫送り」に用いられる人形の種類には「幣身」「『蝗除祭』と書かれた旗」「サネモリ人形」「孔雀の人形」が存在する（写真３）。人形は藁製で白色の布や紙で飾り付けられており、胴体が３０ｃｍ前後、径が３ｃｍで長さ２ｍ前後の竹の先端部に取り付けられている。２組の行列は集落を巡った後、五郎丸神明社に帰還。そののち、虫送りの人形は氏子総代の手によって五郎丸神明社の北西、前原地区との境にある前原水神まで

写真１　五郎丸神明社での祭事の様子

写真２　「虫送り」風景

写真３　「虫送り」の人形たち

運搬され、水神の横に設置された竹製の台に固定される（写真４）。この「虫送り」の人形は前原地区の氏子総代が引き取り、前原地区での「虫送り」で使用するとのことである（以上、当日の調査および参加者からの聞き取りから報告）。

3.「サネモリ虫」についての考察

ここで、「虫送り」で駆除の対象となる「ムシ」について考察したい。「虫送り」に関しては、「蝗送り」「蝗除祭」とも記される。この「蝗」という漢字は現在「いなご」と読まれることが多く、即今の日本では主に直翅目に属するバッタ類の昆虫を指すのが一般的である。しかし、この「蝗」という漢字の本来的な意味はイネを食べる害虫の総称であり、かつ含みとしてはバッタ類よりも、短翅目のウンカやヨコバイ類の小型の昆虫を指す言葉であると考えられている（小西１９７７）。またウンカ類が西日本で「サネモリ虫」と呼称される理由は、ウンカ類の姿が甲冑を付けた姿に見え、それが鎧兜を着た斎藤実盛の姿を連想させたことに由来すると推定されている（伊藤２００１）。矢野（矢野２００２）の研究でも、日本においてこれまでイネの害虫として文献に記録されている昆虫の目別種数は、半翅目（５０．８％）、双翅目（１０．３％）、甲虫目（４．８％）、アザミウマ目（４．０％）と続き、半翅目が半数を占める結果となっており、ウンカ・ヨコバイ類のイネの害虫としての重要性が伺える。しかし、半翅目の昆虫の遺跡からの出土例について見ると、イネノクロカメムシ（*Scotinophara lurida* Burmeister）などカメムシ類の出土報告は多いものの、ウンカ類・ヨコバイ類については、報告例は極めて少ない。古くは青森県や新潟県の縄文～弥生の遺跡で若干の出土例（日浦ほか１９８４）があるほか、最近の例としては朝日遺跡の弥生時代中期中葉の環濠（００７ＳＤ-４層）から、ウンカ類もしくはこれに類似する半翅目の節片が見つかっているが（奥野・森２０１０）、いずれも少数の報告である。ウンカやヨコバイ類の産出例が少ないのは、外骨格が甲虫類と比較すると脆弱であり、土中に化石（遺体）として残存しにくいことが理由としてあげられる。しかし、今昔イネの主要な害虫とみなされてきたウンカやヨコバイ類は、水田稲作農耕の歴史を考える上でも非常に重要である。今後、多くの遺跡で詳細な昆虫考古学的分析を行い、「サネモリ虫」の研究を進めていくことが重要であるといえるだろう。

写真４　前原水神前での人形設置状況

謝辞
本稿を作成するにあたりまして、以下の皆様にご協力頂きました。ありがとうございました（順不同に掲載）。
犬山市五郎丸地区氏子総代の皆様および関係者の皆様、犬山市教育委員会の皆様、西松賢一郎様（大口町歴史民俗資料館）、中野耕司様、ニワ里ねっとの皆様

引用文献

伊藤清司、２００１、『サネモリ起源考　日中比較民俗史』、青土社：東京。
奥野絵美・森　勇一「昆虫化石からみた朝日遺跡の変遷」朝日遺跡Ⅷ総集編，ｐｐ．１２７‐１３３、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第１５４集：愛知。
小西正康、１９７７、「江戸時代の薬学」『学士会々報』７３９号、学士会：東京。
日浦　勇・宮武頼夫・那須孝悌、１９８４、「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編、同朋社：東京。
宮武頼夫、１９９４、「害虫のうつりかわり」『昆虫と自然』２９(８)、ｐｐ18-22、ニュー・サイエンス社：東京。
森　勇一、１９８９、「昆虫考古学のすすめ（１）農業害虫のルーツ」、考古学フォーラム、１、ｐｐ．１０７‐１１１、愛知県考古学談話会。
森　勇一、１９９６、「稲作農耕と昆虫」、季刊考古学、第５６号、ｐｐ．５６‐６３、雄山閣：東京。
森　勇一、１９９９、「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８１集、ｐｐ３１１-３４２、国立歴史民俗博物館：千葉。
矢野宏二、２００２、『水田の昆虫史－イネをめぐる多様な昆虫たち』、東海大学出版会：東京。

入鹿池周辺の古墳踏査成果について

ＮＰＯ法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク会員
服部哲也　近藤健一

1．はじめに

ＮＰＯ法人ニワ里ねっとでは「犬山街プロジェクト」の愛称にて、犬山市文化遺産活用活性化事業を平成２４年度より実施してきた。その中で、調査研究事業として文化遺産の悉皆調査を市域全体で行った。この悉皆調査では市内の遺跡の分布調査を兼ねるような側面もあり、結果として新規の遺跡を多く確認することとなった。

特に新知見が多かった入鹿池周辺の遺跡については、平成２５年度の歴史座「入鹿の里と屯倉」にて速報的に発表したが、ここでは、そのうちの古墳について紹介したい。

現在、「愛知県遺跡地図（Ｉ）尾張地区」（以下「県遺跡図」とする）に記載されている入鹿池周辺の古墳は、十三塚古墳群（１３６～１３９）、北高根古墳（１４５滅失）、奥入鹿古墳（１４４）、篠平古墳（１０３）の８基であり、この他、池に沈んだ入鹿村にあった古墳から出土した刀を収めたと伝えられる地点も刀塚古墳（１５０）の名で遺跡登録されている（図１）。発掘調査された古墳は、十三塚３号墳の１基のみであり、横穴式石室を埋葬施設とし、須恵器、玉類、鉄鏃が出土した。また、現在埋葬施設の確認できる十三塚１号、明治村古墳ともに横穴式石室である。このほかの古墳については詳細不明であるが、悉皆調査前の入鹿池周辺の古墳の印象としては「古墳時代後期の散在したあり方の小古墳群」であった。

現地踏査は、まずは「県分布図」に記載された古墳の有無や位置の確認から始め、さらにその周辺へ踏査範囲を広げる形で行った。また、１９７３年に刊行された「十三塚第３号墳・熊野第１号墳」の発掘調査報告書に掲載の分布地図（以下「報告書分布図」）には、「県遺跡図」とは異なる古墳情報もあるため、これらの地点の確認も行い、実際に残る古墳を整理して記録することに努めた。

2．各地区の古墳

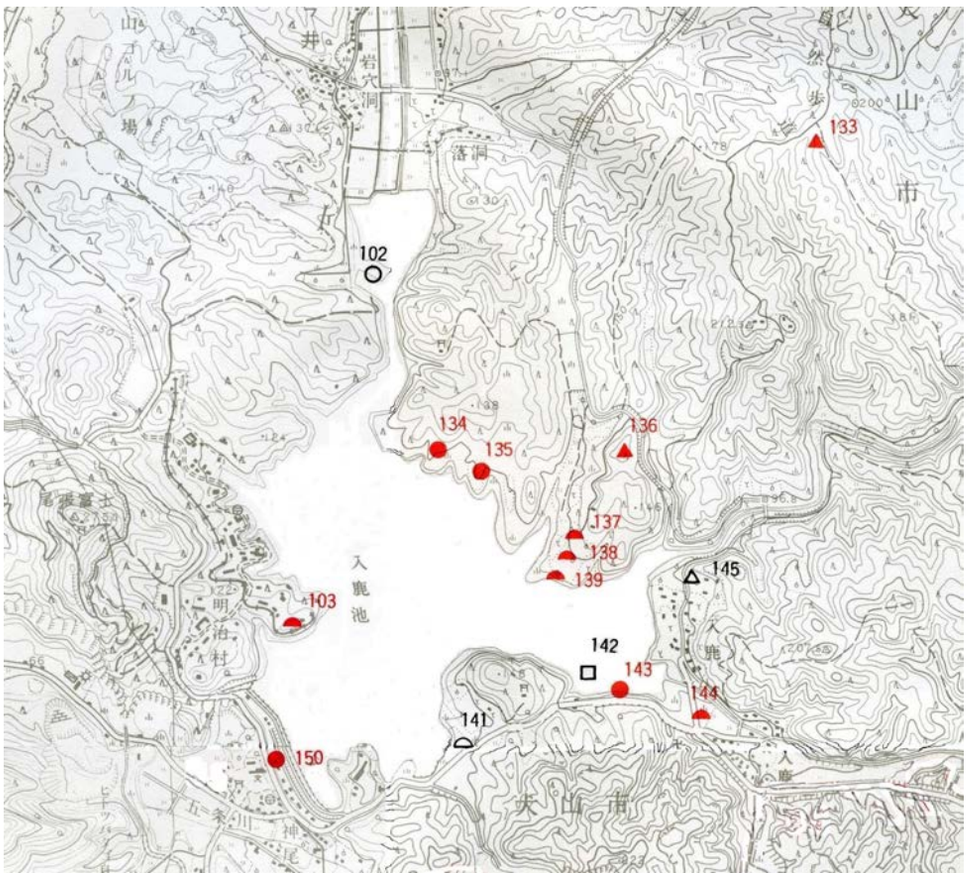
西山地区（十三塚古墳群）

「県遺跡図」では、舌状に延びる丘陵の端部に１・２・４号墳の３基（県１３７～１３９）、それより約６００ｍ北に離れた丘陵頂部に３号墳（県１３６）が記され、「報告書分布図」には１号墳の西に５号墳が記されている（図２―５）。このうち、今回の現地調査で遺存が確認できたのは、１号墳２号墳の２基のみであり、発掘調査された３号墳は現地に残るはずであったが確認できなかった。なお、１・２号墳の位置は「報告書分布図」が正しく「県遺跡図」はかなりのズレがある。

新規発見古墳　この地区では、古墳の可能性ある２基をあらたに確認した。１基（図４－１）は「十三塚之碑」東３０ｍの丘陵裾部に位置する。残る墳丘は高さ１ｍほどであるが、その平面規模は約２０ｍであり、この地区の古墳としては大きい。中央に石室石材に適した大柄な石が立っており、埋葬施設は横穴式石室と考えられる。ただし、石の周辺は大きくくぼんでおり、ほとんどの石材は抜き取られているものと思われた。

もう１基（図４－２）は、さらに２００ｍほど北北東の丘陵西斜面に位置し、規模は直径１２ｍ前後、高さ１ｍほどである。マウンド以外に古墳の確証はないが、可能性を考えておきたい。

これら新規の２基は、１・２号墳と３号墳の中間にあたることから、十三塚古墳群が現在知られるよりも大きな群構成であった可能性を



102	横山遺跡（旧石器）
135	入鹿池 B 遺跡（旧石器）
134	入鹿池 A 遺跡（弥生）
136 ～ 139	十三塚古墳群（古墳）
103	明治村古墳（古墳）
141	篠平古墳（古墳）
144	奥入鹿古墳（古墳）
145	北高根古墳（古墳）
143	喜六屋敷遺跡（室町）
133	安大寺古窯（中世）
142	篠平寺院跡（江戸）
150	刀塚（古墳出土品埋納塚）

図 1 「愛知県遺跡地図（ I ）尾張地区」

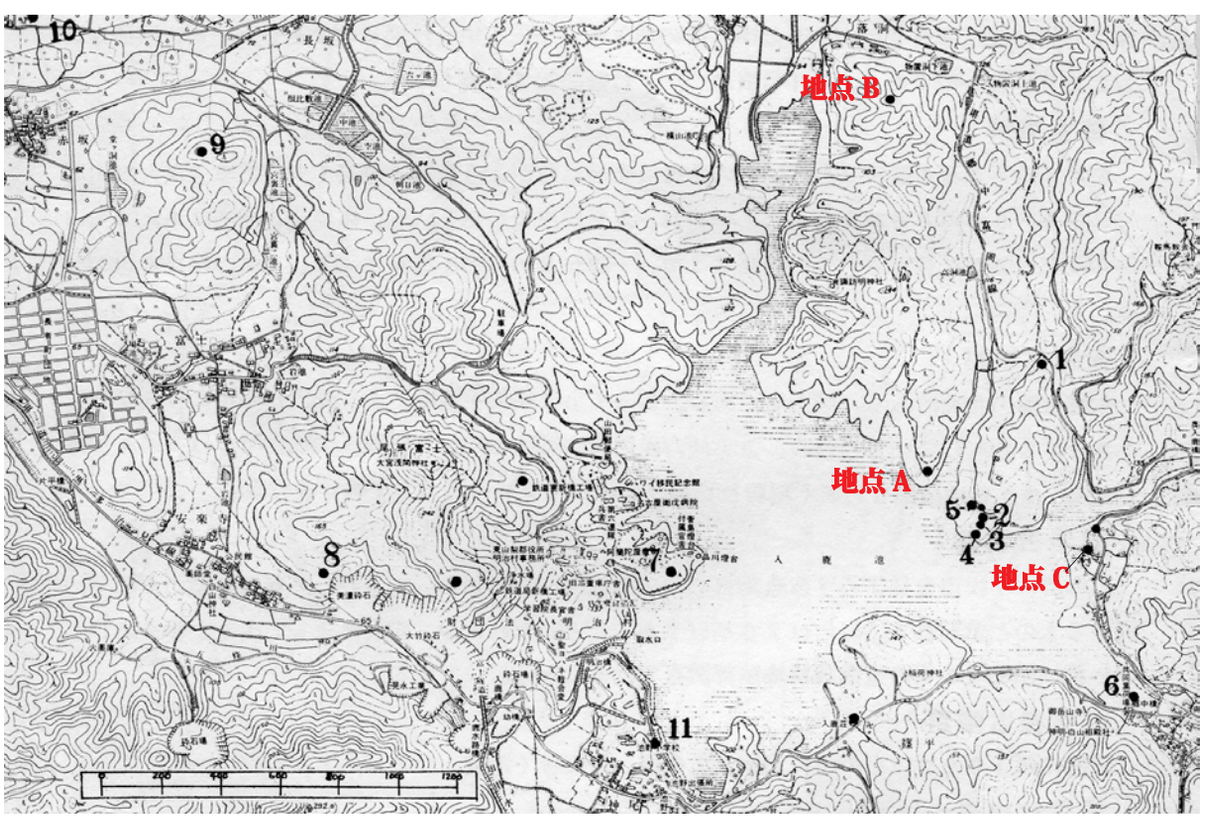


図 2「十三塚第 3 号墳・熊野第 1 号墳」掲載の分布地図（地点 A ～ C 加筆）

高めたといえよう。

洞奥地区

十三塚古墳からは谷を挟んだ西側の地区である。「県遺跡図」ではこのエリアに古墳はないが、「報告書分布図」には、丘陵先端部にドットが落とされており、本文中に解説はないものの、当時古墳の可能性を考えられていたことがわかる（図２―地点Ａ）。また、さらに西２００ｍほどの地点にて露頭した横穴式石室があったことを飯尾恭之氏が写真とともに紹介している（図４―３）。残念ながら、この２基については、現在古墳の痕跡を見つけることはできなかった。

新規発見古墳　この地区で新規発見となった古墳はさらにもう一つ谷を西に越えた、南西に複雑に張り出す小尾根の頂上に立地する。周辺では最も高いピーク（標高１３８ｍ）であり、築造当時は広く入鹿盆地を眼下に眺望できたであろう絶好地である（図４―４）。狭い頂上に位置するため、墳丘規模は不明であるが、おおよそ１５～２０ｍ規模の円墳であろう。大小１７個の石が露頭しており、その石の組まれた様子から南に開口する横穴式石室を埋葬施設とすることは明らかであった（写真１）。玄室と羨道の境である玄門地点もほぼ確認できることから、玄室は長さ約３ｍ、幅約１．５ｍと推定できる。天井部は消失しているが遺残状況は良い。時期は６世紀後半から７世紀前半頃と推定できよう。また、現状では単独墳の様相であるが、本当に群をなさないのか、周辺の踏査を継続し確認したい。

写真１　洞奥地区の新規発見古墳

落洞地区

「報告書分布図」には、今井から入鹿池に流れ込む成沢川左岸の落洞地区にも、ドットが落ちていた（図２―地点Ｂ）。報告書本文中に説明はないものの、古墳の可能性を考えられていたようである。これを頼りに現地に行けば、果たしてマウンドを確認することができた。標高は約１４０ｍであり、奥入鹿から今井地区を遠望することができる好地である。直径２０ｍほど、高さも２ｍはある。

新規発見古墳　この「報告書分布図」ドット地点より、３０ｍほど東の地点にてさらにもう1基、同様のマウンドがあることを確認した（図４―５）。こちらも直径が１５ｍはあり、高さも２ｍほどとしっかりとしている。

ただ、これらの２基は、横穴式石室墳であれば地表に現れている場合の多い石材の露出や、盗掘痕や石材抜き取り痕などの埋葬施設部分の落ち込みが一切認められない。さらに葺石・埴輪などの外部施設、また、副葬品にかかわるような遺物も確認されていないため、古墳と認定する証拠は弱い。ここでは可能性を指摘するにとどめ、今後の調査を待ちたい。

入鹿地区

十三塚古墳から五条川対岸の北高根地区には北高根古墳（県１４５）が記されている。「報告書分布図」には南西側にもう１基（図２―地点Ｃ）あったことが述べられるが、どちらも現在は滅失であり確認できない。また現在の郷中新橋たもとには奥入鹿古墳（＝郷中古墳、県１４４）が知られる。こちらは直径１０ｍにも満たない小盛土が確認できるが、古墳としての内容は不明である。

篠平地区

入鹿池に突き出た通称天道山の南には、すでに破壊され消失しているが、篠平古墳（県１４１）が知られる。入鹿の里ＭＵＳＩＣＡの石垣が古墳石室の一部とも伝えられるが、詳細は不明である。

新規発見古墳　この篠平古墳より南東約２００ｍの地点にて横穴式石室を埋葬施設とした古墳を新たに発見した（図４―６）。篠平古墳と同じ北西に延びる尾根上の立地であり、篠平古墳の高位に位置すること

となる。直径15mほどの円墳で、墳丘も高さ2m以上を保つ。横穴式石室は天井石の一部が抜き取られ、石室内を覗くことができたが、流入土により大半は埋もれている（写真2）。羨道部から前庭部にかけても、石組を追うことができ、石室の遺存度はとても良い。また古墳裾部には人頭大ほどの石材も散布しており、外護列石等の石積みが残っている可能性もある。時期は6世紀後半から7世紀前半頃と推定できよう。

写真2　篠平地区の新規発見古墳

明治村地区

園内の幸田露伴宅裏手に、明治村古墳（県103）が残っている。直径10m高さ2mほどの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とし南西に開口している。明治村周辺には、4～5基の古墳があったといわれるが、現在知られているのはこの1基のみである。ただし、今回は園内の踏査は行っていない。一度は園内をくまなく踏査する必要もあろう。

根比敷取苴片平地区

さて、これまでの新規発見古墳は「県遺跡図」および「報告書分布図」を基本にしてその周辺に踏査を広げたことで見つかったものであったが、根比敷取苴片平地区の古墳発見については趣が異なる。悉皆調査の過程で昭和26年4月発行の「羽黒村全図」に「古墳」の記号を見つけ、その確認に現地入りしたことが発見の契機であった（図3）。

根比敷取苴片平地区は、明治村と犬山カンツリー倶楽部に挟まれた地区で、現在は雑木林となっている。地形的には入鹿池に流れ込む成沢川右岸の丘陵地である。「羽黒全図」では南東に張り出す枝尾根上に7基の古墳が記されていたが、これまで全く古墳の知られていない地区であっただけに、半信半疑で現地に赴いた。ところが、その内の1基が位置的にも一致し、さらに連続して2基、少し下がった尾根上にこれも連続して3基、谷を一つ越えた別の枝尾根上に1基の計7か所で古墳らしきマウンドを確認することとなった（図4―7～8）。これらの7基は、すべてよく似た特徴を持つ。規模は直径もしくは一辺（墳形は円墳・方墳判断できない）が15～20mで、墳丘は高さ1～2mまでと低い。盗掘孔もしくは埋葬施設の陥没による落ち込みが中央付近にみられる。その落ち込みは中央に限られ、羨道部は不明瞭。石材がわずかに散在するものの総じて小さく、鏡石や天井石に使用されるような大柄な石材は認められない、などである。残念ながら、埴輪や副葬品にかかわるような遺物は確認できてはいないので確証的なことは言えないが、先にみた墳丘の特徴から、竪穴系の石室か初期の横穴式石室を埋葬施設とする、5世紀後半～6世紀前半頃の群集墳を想定しておきたい。

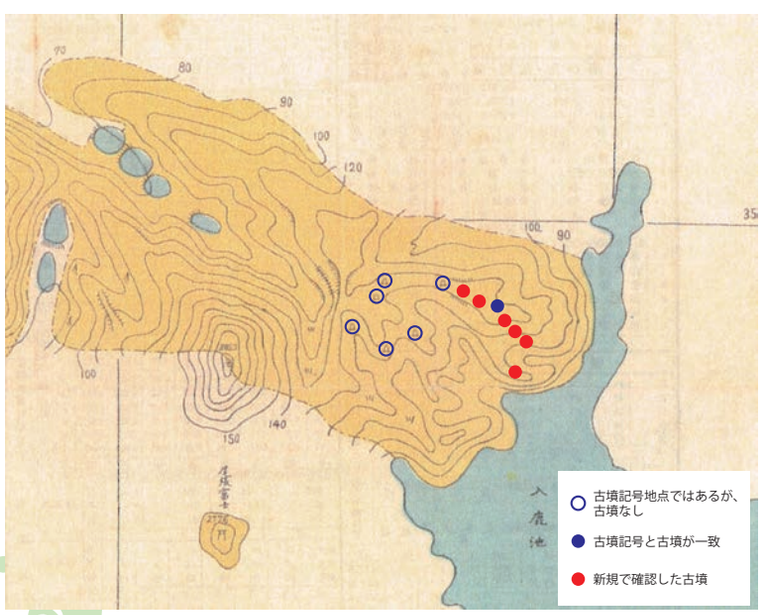


図3「羽黒村全図」（部分に加筆）

3．おわりに

今回の踏査では、12か所にて新たな古墳の可能性を指摘した。「県遺跡地図」に記載のある8基と、これまで知られていたが「県遺跡地図」には記載のない5基を加えれば、入鹿池周辺で実に25基の古墳が入鹿盆地を囲んでいたこととなる。

そのうち、洞奥・篠平地区の2基は明らかな後期の横穴式石室墳であり、これまで知られていなかったこと自体が大層な驚きであった。今一度、市域全体を隈なく歩く必要性を強く感ずるものである。

12か所のうち、最も注目されるのは、根比敷取茸片平の7基と落洞の2基である。他はこれまで知られていた、後期の横穴式石室墳の類例を増やしたものであり、いわば想定された古墳であったが、根比敷取茸片平の7基と落洞の2基は、その形状や群構成がほかとは明らかに違う。残念ながらこのポイントとなる9基が、古墳としての確たる証拠はなく、可能性の域を出ないのも事実であり、今後、より詳しい測量調査や、試掘的な発掘調査、そして本格的な発掘調査へと進むことを強く望みたい。

入鹿池周辺の遺跡は古墳のみならず、県内でも珍しい旧石器が広範囲で採取されている地であり、縄文・弥生時代についても踏査の過程で新たな発見があった。もちろん入鹿屯倉の有力な推定地であることにも変わりなく、この地域の歴史を読み解く「鍵」となる地である。今回の成果はまだ中間報告に過ぎない。今後も当法人の活動の一つとして進めていきたいと思う。

参考引用文献

愛知県教育委員会、1986、『愛知県遺跡分布地図（Ⅰ）尾張地区』、愛知県

飯尾恭之、2005、『サンカ・廻游する職能民たち―尾張サンカの研究 実証編（サンカ学叢書）』、批評社

犬山市教育委員会、1972、『犬山市埋蔵文化財調査報告第2集』、犬山市

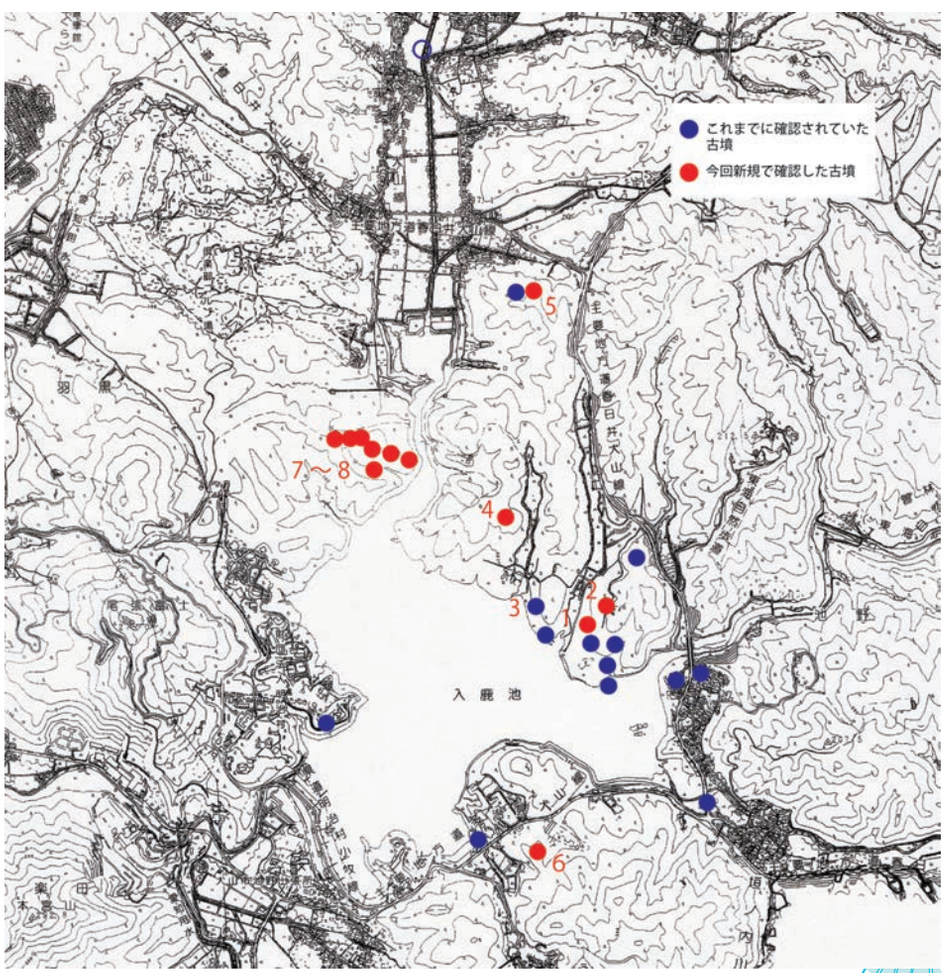


図4　入鹿池周辺の古墳

ただ今、派遣中！

―東日本大震災復興関連の発掘調査に参加して―

服部哲也

平成２６年１月より、名古屋市からの派遣で岩手県宮古市にて震災復興支援の発掘調査に携わっています。「遺跡の発掘調査が震災復興支援の仕事なの？」と、いぶかしく感じられるかもしれませんね。まずは、私がなぜ被災地に来ているのかをお話ししておきたいと思います。

今回の東日本大震災の大きな特徴が、甚大なる津波被害であることはあらためて述べるまでもありませんが、実は沿岸地にあるほとんどの遺跡は被災しませんでした。図１は私が現在参加している「津軽石大森遺跡」周辺の遺跡と津波浸水域を重ねた図ですが、津波がほとんどの遺跡の手前で止まっているのがわかると思います。言い換えれば古（いにしえ）の人々は津波の来ない安心安全の土地に住まいを構え、その安心安全を巨大防潮堤に求めた現代人は再び津波に襲われてしまったのです。あまりにも大きな代価ではありましたが、今回ようやく多くの自治体が高台移転の決断をしました。古代人の知恵に現代人も習うことになったのですが、皮肉なことに今度は高台にあった多くの遺跡が壊されることとなりました。結局、遺跡も今回の津波により間接的に「被災」してしまったのです。

被災地自治体の発掘調査件数は一気に膨れ上がり、憂いた文化庁は全国の自治体へ調査員の派遣を要請しました。名古屋市もそれに応ずるかたちで職員派遣を決定し、その後の調整で派遣先は岩手県宮古市となりました。

岩手県は北海道に次ぐ全国２番目の広さなのですが、その広い岩手県は、北上川沿いの内陸部と三陸海岸沿いの沿岸部に大きく分けられます。宮古市は沿岸部のほぼ中央にあたり、市の中心へは県庁所在地の盛岡から急行バスかＪＲ列車（１日４本。とてもものんびり感がありますが）で、どちらも２時間とチョイかかります。人口５万６千人。三陸復興国立公園や三陸ジオパークなど海のイメージが強いのですが、町村合併が進んだ現在は、北上山地や早池峰国定公園などの山々も含まれることとなり、山あり川あり海ありの豊かな自然に囲まれた市です。

宮古市の震災被害は、全壊家屋約９０００、死者・行方不明者は５１７名と甚大で、現在も仮設に暮らす人は３０００人を超えています。特に田老地区では、昭和の大津波後に建設した巨大な防潮堤（万里の長城とも呼ばれていた）に囲まれていたことで、防潮堤への過信が人的被害を大きくしたことは否めないでしょう。その田老地区では震災遺構として田老観光ホテルが保存されることとなり、楽々と越えられた防潮堤では震災学習ツアーが行われています。

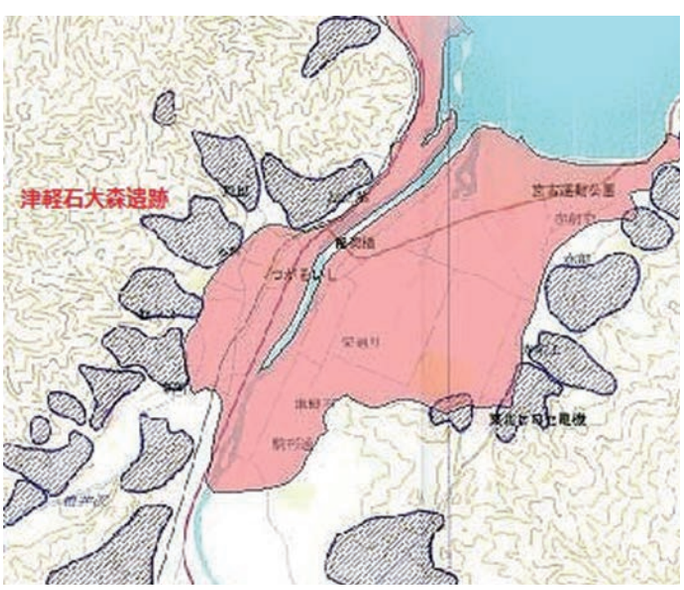


図１　津軽石大森遺跡周辺図（青…遺跡範囲、ピンク…津波浸水域）

宮古市の復興までの全体計画は３段階９年の予定で、第１期基盤復興＝住民合意・計画策定・用地取得など（平成２３～２５年）。第２期本格復興＝造成工事・順次建設（平成２６～２８年）。第３期発展＝震災以前よりも活気のある街づ

くり（平成２９～３１年）です。いわゆる、高台への集団移転は第２期の平成２８年度までに終える計画にあります。

宮古市教育委員会文化課では「遺跡の調査を復興遅れの原因とは言わせない！」を合言葉に、素早い対応がとられました。まずは遺跡地への高台移転を極力避ける調整に力がそそがれ、遺跡への影響が避けられない場合も、被災地では最も早い被災３か月後には復興関連の発掘調査を実施し、さらに派遣を含めた多くの職員を集中的に投入するなどの対策が取られました。結果、高台移転に関連する発掘調査は、震災３年後の平成２５年度までにほぼ終了させています。

現在、私も参加している津軽石大森遺跡の調査は「津波復興拠点整備事業」として、被災した公民館・保育園・消防団詰所の移転に伴うものです。縄文時代前期と古代を中心とした集落遺跡で、宮古市の職員１人と派遣職員３人の体制です。調査の方法や手順、そして道具に至るまで、これまでの経験とは異なることも多く戸惑いもありますが、宮古市職員の補佐に徹し、少しでも助けになればと思っています。写真１はその調査風景です。調査地の下に写っている家はすべて津波で被災しています。逆に津波が到達しなかったぎりぎりの際から縄文や古代の竪穴建物が出土した時には本当に驚きました。こうした発掘調査で明らかとなった先人の知恵は是非次世代へ伝えたいと思います。

さて、今回の東日本大震災と阪神淡路大震災を復興の点で比べて大きく異なるのは、被災地が「災害危険区域」となったため、いわゆる高台移転が実行されることにあります。被災した街を、その場所で元のかたちに復さないことは、復興の進み具合を非常にわかりづらくしています。一方では震災から３年がたち、遠く離れて暮らす人々の記憶からは「忘れる」ことも進んできているのではないでしょうか。ただ、こちらに来て実感として強く思うことは、復興まではまだまだ時間がかかるということです。その現状を伝えることも任務の一つと理解し、残りの任期を全うしたいと思います。

写真１　津軽石大森遺跡調査風景

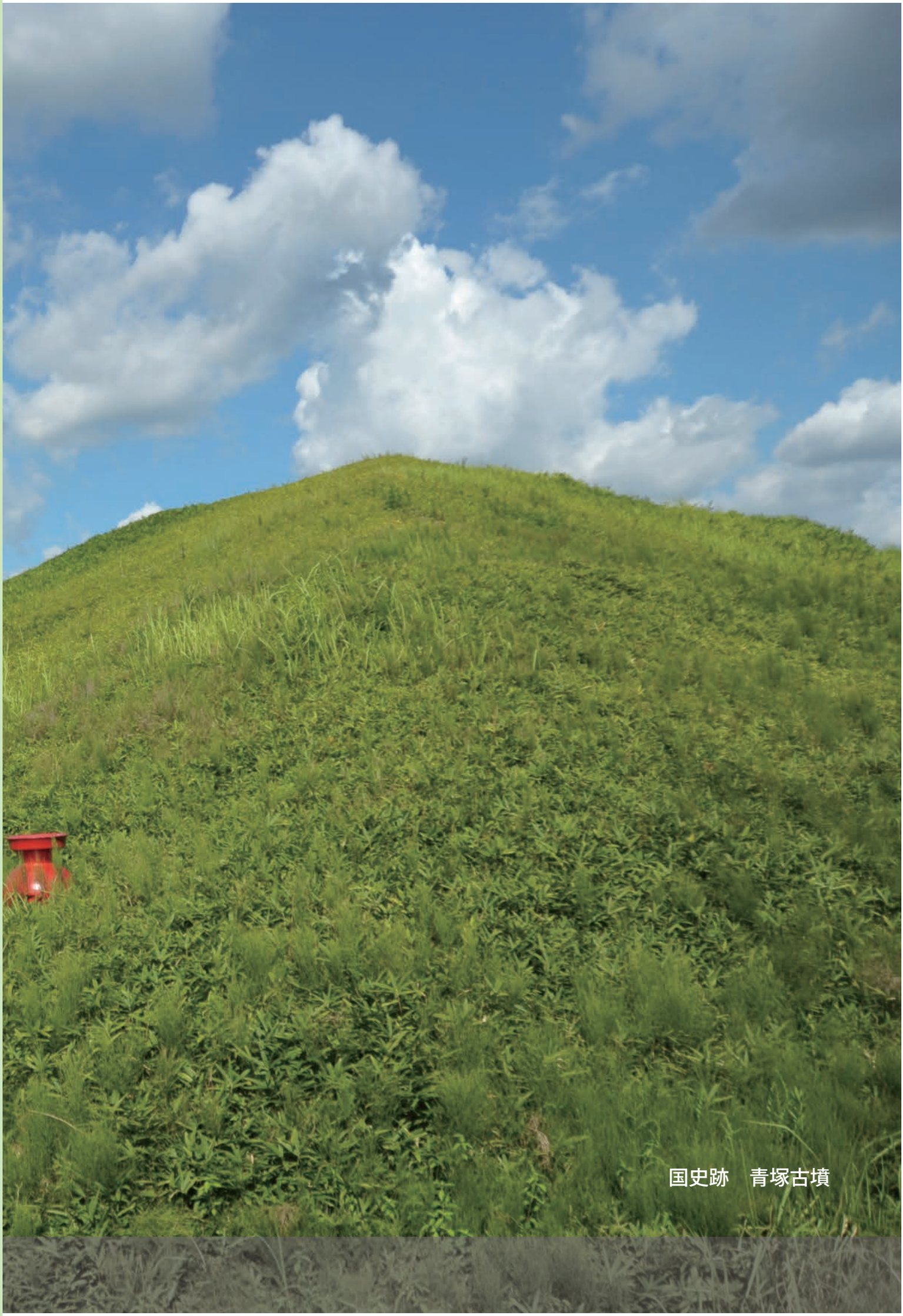
研究紀要 「邇波」 創刊号
平成 26 年 5 月 25 日発行

編集発行
特定非営利活動法人・古代邇波の里・文化遺産ネットワーク（ニワ里ねっと）

〒 484－0084　愛知県犬山市大字犬山字南古券 288－7
℡ 0568-68-2272

表紙写真：新緑の青塚古墳

本紙写真協力：中野耕司氏



国史跡　青塚古墳